

令和4年度

# 久留米市内遺跡群

三反田遺跡（第2次調査）

へボノ木遺跡（第75次調査）

筑後国分尼寺跡（第2次調査）

筑後国府跡（第311次調査）

令和5（2023）年3月

久留米市教育委員会

令和4年度

# 久留米市内遺跡群

三反田遺跡（第2次調査）

へボノ木遺跡（第75次調査）

筑後国分尼寺跡（第2次調査）

筑後国府跡（第311次調査）

令和5（2023）年3月

久留米市教育委員会

## 序

筑紫平野の中心に位置する久留米市は、九州最大の河川である筑後川と、耳納連山の山並みに代表される、水と緑が豊かな都市です。一方で、少子高齢化や高度情報化などの社会環境の変化に対応するために、本市では市民と行政がパートナーシップの理念の基に協働し、質の高い生活中心の街づくりを推進しております。また、豊富な水と緑を活かした、歴史が見えるまちづくりを実現するため、歴史風土の継承に尽力しているところです。

この恵まれた環境と立地は、今日を生きる私たちだけでなく、先人の生活や社会・文化にも多大な影響を与えてきました。先人の足跡は、市内各所に存在する文化財として今日に残されています。私ども教育委員会では、開発によって失われる、先人の残した貴重な文化財を後世に伝えて行くために、現状保存、あるいは発掘調査による記録保存の措置を講じています。

今回、本書で報告するのは令和3年度から令和4年度に国庫補助および県費補助を受けて発掘調査が実施された遺跡です。古代の遺構と遺物を確認した三反田遺跡とヘボノ木遺跡、29年ぶりの発掘調査で基壇や瓦を発見した筑後国分尼寺跡、国司館の遺構を再確認した筑後国府跡、以上4遺跡の報告を収録しております。

本書が、地域史の研究や学習の一資料として、また文化財保護行政に対する理解とその普及の一助として役立つことができれば幸いに存じます。

末文となりましたが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解をいただきました土地所有者の方々をはじめ、関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和5年3月31日

久留米市教育委員会  
教育長 井上 謙介

## 例 言

1. 本書は、令和3年度から令和4年度に久留米市市民文化部文化財保護課が国費・県費の補助を受けて実施した、久留米市内遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は久留米市教育委員会が主体となり、市民文化部文化財保護課の江島伸彦と西拓巳、小川原励、長谷川桃子が担当した。
3. 本書に掲載した、各遺跡の調査番号と遺跡略記号は第1表に掲載した。遺跡略記号については（略記号）－（調査回数）の順で記載した。
4. 本書に掲載した遺構実測図の測量は、調査担当者と発掘作業員の池田隆司、井上吉清、大淵文子、進上裕水、原学、舟越朝菜、本荘郁子、山口誠也、山田治代が行った。遺構配置図はトータルステーションで三次元データを取得し、株式会社CUBIC製遺構実測ソフト「遺構くんcubic」にて編集・保存した。土層は、手測り（1/10）で調査担当者が作成した。
5. 遺構実測図は、国土調査法第Ⅱ座標系を用いて、三反田遺跡と筑後国分尼寺跡は世界測地系を元に、筑後国府跡とヘボノ木遺跡は日本測地系を元に作成した。遺構実測図の方位は、全て座標北を示す。なお三反田遺跡第2次調査のみ、平成28年の熊本地震に伴うパラメータ補正を行った。
6. 埋土と出土遺物の色調は、『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、昭和42年）に拠った。
7. 遺構実測図の浄書は、調査担当者と文化財資料整理員の今村理恵、宮崎彩香、出土品整理作業員の山元博子、横井理絵が行い、「遺構くんcubic」と米国アドビ製の製図ソフト「Adobe Illustrator」を用いた。
8. 遺構写真は、キヤノンEOS 6 D Mark. II デジタルカメラとリコーPENTAX K-1 II デジタルカメラを用いて各担当者が撮影し、筑後国府跡の空中写真は、有限会社空中写真企画に委託し撮影した。写真は掲載にあたり、米国アドビ製の画像編集ソフト「Adobe Photoshop」で編集した。
9. 本書に使用した遺構の略記号は下記のとおりである。

S A……冊列	S B……掘立柱建物	S D……溝
S K……土坑	S P……ピット	S X……その他の遺構
10. 遺物実測は、調査担当者と今村、宮崎、出土品整理作業員の江口織織が行った。
11. 遺物実測図の凡例は、下記のとおりである。
  - ・断面の黒塗りには須恵器、斜線は鉄製品を意味する。内外面の赤塗りは丹塗を示す。
  - ・調整の線は、直線「————」が明瞭な稜線を、間隔の長い破線「—— ———」が不明瞭な稜線を、一点鎖線「- - - -」が回転ナデを示す。
12. 遺物観察表は、調査担当者が作成した。その凡例は、下記のとおりである。
  - ・法量の単位はcmである。〔 〕は復元値、（ ）は残存値を、－ は欠損または該当する部位が無いことを示す。

- ・胎土は、0.5mm未満の砂粒を「微砂粒」、1cm未満を「細砂粒」、1cm以上を「砂粒」とした。
- ・貿易陶磁器の分類は大宰府分類に準拠し、『大宰府条坊跡 一陶器分類編一』大宰府市の文化財第49集（大宰府市教育委員会、平成12年）に拠った。
- ・古瓦の叩き目の名称は、『筑後国府跡 一平成11年度発掘調査概要一』久留米市文化財調査報告書第162集（久留米市教育委員会、平成12年）に拠った。瓦当文様の名称は、『九州古瓦図録』（九州歴史資料館・編、柏書房、昭和56年）に拠った。
- ・登録番号は、久留米市役所市民文化部文化財保護課が定める、出土遺物の登録番号である。

(例) 202110-000001

調査番号      登録番号

13. 遺物実測図の浄書は、調査担当者の実測を行った整理員、作業員が「Adobe Illustrator」で行った。
14. 遺物写真は、久留米市埋蔵文化財センターにおいて西と小川原がニコンD500デジタルカメラで撮影した。写真は掲載にあたり、「Adobe Photoshop」で編集した。
15. 掲載した採集資料は、いずれも久留米市埋蔵文化財センター蔵である。また、本書に収録した遺物及び図面、写真などの調査に関連する記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、活用される予定である。
16. 本書の執筆は各担当者が行い、文責は本文目次及び文末に記した。全体の編集は、各担当者で協議の上、西が担当した。

## 本文目次

I. はじめに	(西)	1
II. 三反田遺跡(第2次調査)	(西)	3
III. ヘボノ木遺跡(第75次調査)	(西)	15
IV. 筑後国分尼寺跡(第2次調査)	(小川原)	33
V. 高倉遺跡(第2次調査、概要報告)	(小川原)	50
VI. 庄屋野遺跡(第10~11次調査、概要報告)	(長谷川)	51
VII. 庄屋野遺跡(第12~14次調査、概要報告)	(長谷川)	52
VIII. 筑後国府跡(第311次調査)	(小川原)	53
[巻末]抄録		巻末

## 挿図目次

### II. 三反田遺跡(第2次調査)

第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図(1/25,000)	4	第10図 SD2・3完掘状況(南西上空から)	9
第2図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)	4	第11図 SD2中央土層(南東から)	9
第3図 表土剥ぎ風景(北西から)	6	第12図 SD2西端土層(南東から)	9
第4図 調査風景(南西から)	6	第13図 SD3中央土層(南東から)	9
第5図 調査区全景(南上空から)	6	第14図 SX35断面図(1/40)	10
第6図 遺構配置図(1/100)	7	第15図 SX35完掘状況(南東から)	10
第7図 SD1~3土層図(1/20)	8	第16図 出土遺物実測図(1/4)	11
第8図 SD1全景(北から)	9	第17図 出土遺物写真1	12
第9図 SD1南端土層(北から)	9	第18図 出土遺物写真2	13

### III. ヘボノ木遺跡(第75次調査)

第19図 調査地点と周辺の遺跡分布図(1/25,000)	16	第27図 調査区南部全景(西上空から)	19
第20図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)	16	第28図 SA17実測図(1/60)	20
第21図 表土剥ぎ風景(北西から)	18	第29図 SA17完掘状況(西上空から)	20
第22図 調査風景(北から)	18	第30図 SB3実測図・土層図1(1/40・1/20)	21
第23図 調査区北西壁面土層(南から)	18	第31図 SB3土層図2(1/20)	22
第24図 調査区北西壁面土層図(1/20)	18	第32図 SB3北部全景(北西上空から)	22
第25図 遺構配置図(1/100)	19	第33図 SB3南部全景(北西上空から)	22
第26図 調査区北部全景(西上空から)	19	第34図 SB3P1土層(北東から)	22

第35図	S B 3 P 7 土層 (北西から)	22	第45図	S D 42土層 (北東から)	25
第36図	S B 35完掘状況 (西上空から)	23	第46図	S K 15完掘状況 (東から)	25
第37図	S B 35土層 (北から)	23	第47図	S K 15実測図・土層図 (1/40)	26
第38図	S B 35実測図 (1/40)	23	第48図	出土遺物写真 1	26
第39図	S D 1・2・5・42断面図 (1/20)	24	第49図	出土遺物実測図 (1/4、1/2)	27
第40図	S D 1 完掘状況 (南西から)	24	第50図	出土遺物写真 2	28
第41図	S D 1 北端土層 (南西から)	24	第51図	出土遺物写真 3	29
第42図	S D 2・5 完掘状況 (南西から)	25	第52図	ヘボノ木遺跡中央地区主要遺構図 (1/1,000)	30
第43図	S D 5 中央土層 (南西から)	25	第53図	S B 35・66 S D 130実測図 (1/80)	31
第44図	S D 42完掘状況 (北東から)	25			

#### IV. 筑後国分尼寺跡 (第2次調査)

第54図	調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	34	第68図	南区東西土層堆積状況 4 (北から)	42
第55図	調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)	35	第69図	南区東西土層堆積状況 5 (北から)	42
第56図	南区遺構検出状況 (西から)	35	第70図	南区東西土層堆積状況 6 (北から)	42
第57図	南区サブトレンチ掘削状況 (西から)	36	第71図	南区東西土層堆積状況 7 (北から)	42
第58図	北区遺構検出状況 (西から)	36	第72図	南区南北土層堆積状況 (西から)	42
第59図	北区調査風景 (西から)	36	第73図	S K 1 完掘状況 (北から)	42
第60図	遺構配置図 (1/80)	36	第74図	S P 2 完掘状況 (東から)	42
第61図	南区東西土層図 1 (1/20)	38	第75図	出土遺物実測図 1 (1/4)	43
第62図	南区東西土層図 2 (1/20)	39	第76図	出土遺物実測図 2 (1/4)	44
第63図	南区東西土層図 3 (1/20)	40	第77図	出土遺物写真 1	45
第64図	南区南北土層図 (1/20)	41	第78図	出土遺物写真 2	46
第65図	南区東西土層堆積状況 1 (北から)	41	第79図	出土遺物写真 3	47
第66図	南区東西土層堆積状況 2 (北から)	41	第80図	S X 3 範囲推定図 (1/150)	49
第67図	南区東西土層堆積状況 3 (北から)	42			

#### V. 高倉遺跡 (第2次調査、概要報告)

第81図	調査地点の位置図 (1/25,000)	50	第83図	井戸掘削状況 (北上空から)	50
第82図	調査区全景 (北上空から)	50			

#### VI. 庄屋野遺跡 (第10~11次調査、概要報告)

第84図	調査地点の位置図 (1/25,000)	51	第86図	第11次調査区全景 (北上空から)	51
第85図	第10次調査区全景 (北上空から)	51			

## Ⅶ. 庄屋野遺跡（第12～14次調査、概要報告）

第87図 第12次調査区全景（北上空から）	52	第89図 第14次調査区全景（南西から）	52
第88図 第13次調査区全景（北上空から）	52		

## Ⅷ. 筑後国府跡（第311次調査）

第90図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）	54	第93図 遺構配置図（1/200）	56
第91図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	55	第94図 調査区全景（南上空から）	56
第92図 調査風景（南西から）	55		

# 表 目 次

第1表 『令和4年度 久留米市内遺跡群』掲載遺跡一覧表	1
第2表 三反田遺跡第2次調査出土遺物観察表	10
第3表 へぼノ木遺跡第75次調査出土遺物観察表	27
第4表 筑後国分尼寺跡第2次調査出土遺物観察表	48



# I. はじめに

## 1. 令和3・4年度実施調査の概要

久留米市では、平成5年度より発掘調査等国庫補助事業によって発掘調査を実施した遺跡について、『久留米市内遺跡群』として成果を取りまとめ、報告書を毎年刊行している。

令和4年度の市内遺跡発掘調査等国庫補助事業による調査は、令和3年度から継続中の益生田古墳群第5次調査を含めて、令和5年1月31日現在8件である。調査原因は、益生田古墳群第5次調査が重要遺跡確認調査、筑後国分尼寺跡第2次調査が建売住宅建設に先立つ確認調査である外は、いずれも専用住宅建設である。

本年度の報告書は、令和3年度に実施した三反田遺跡第2次調査とヘボノ木遺跡第75次調査、筑後国府跡第311次調査、および令和4年度に実施した筑後国分尼寺跡第2次調査の本報告を掲載した。併せて、令和4年度に実施した高倉遺跡第2次調査と庄屋野遺跡第10～14次調査の概要報告を収録した。報告書作成に係る整理作業は、久留米市埋蔵文化財センターと西町文化財整理事務所において実施した。

なお、益生田古墳群第5次調査の概要報告は、『令和3年度久留米市内遺跡群』（久留米市文化財調査報告書第432集、令和4年）に掲載しているのご参照頂きたい。

第1表 『令和4年度 久留米市内遺跡群』掲載遺跡一覧表

調査年度	調査番号	遺跡名	調査回数	調査期間	調査面積	担当者	調査原因	遺跡略記号	備考
R 3	202110	三反田遺跡	第2次調査	20210607～20210625	119㎡	西 拓巳	専用住宅	STD-002	本報告
R 3	202116	ヘボノ木遺跡	第75次調査	20220207～20220311	85㎡	西 拓巳		IBN-075	本報告
R 3	202118	筑後国府跡	第311次調査	20220307～20220324	215㎡	小川原 励	確認調査	TKI-311	本報告
R 4	202202	筑後国分尼寺跡	第2次調査	20220411～20220426	38㎡	小川原 励	確認調査 (建売住宅)	KBN-002	本報告
R 4	202205	高倉遺跡	第2次調査	20220705～20220729	95㎡	小川原 励		TKK-002	概要報告
R 4	202207	庄屋野遺跡	第10次調査	20220908～20220922	59㎡	長谷川桃子	専用住宅	SYN-010	概要報告
R 4	202208		第11次調査		95㎡	長谷川桃子		SYN-011	概要報告
R 4	202210		第12次調査		89㎡	長谷川桃子		SYN-012	概要報告
R 4	202211		第13次調査	20221108～20221128	89㎡	長谷川桃子		SYN-013	概要報告
R 4	202212		第14次調査		9㎡	長谷川桃子		SYN-014	概要報告

## 2. 調査の体制

令和4年度の発掘調査等国庫補助事業に係わる調査の体制は、以下のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長	井上 謙介
調査総括：久留米市市民文化部	部 長	竹村 政高
	次 長	深堀 尚子
文化財保護課	課 長	水島 秀雄
	課長補佐	田中 健二
	課長補佐兼課主査	白木 守、丸林 禎彦
	主 査	小澤 太郎
	事務主査	江島 伸彦
	庶務担当	本田 岳秋、辻 貴子
	事前確認担当	熊代 昌之、小川原 励
発掘調査・整理・報告書作成担当		江島 伸彦、西 拓巳、 小川原 励、長谷川桃子
整理担当（文化財資料整理員）		今村 理恵、宮崎 彩香

### 発掘作業員

秋水 絹子、池尻 忠行、池田 隆司、稲益 元之、井上 知義、井上 吉清、江藤 光男  
 大熊 澄子、大塚ヒロ子、加藤 登、川野 洋之、川原 初美、黒岩 秀則、合戸 喬一  
 古賀 晴美、佐田農夫男、坂田 康史、高尾 春代、田中 樹子、長野 晃久、中村 麻衣  
 原 学、平川 真保、平田 広之、藤木 幸子、二村 智治、舟越 朝菜、本荘 郁子  
 松尾 朱美、松本 金一、丸山 幸、溝口 輝男、宮原 眞助、村田 雅巳、山崎 秀雄  
 渡辺しげ子

### 発掘調査整理作業員

井上千恵美、梶島かおり、黒川 景太、野口 晴香、野間口靖子、福島 章一、吉武 大輝

## 住宅建設に伴う発掘調査

三反田遺跡（第2次調査）

へボノ木遺跡（第75次調査）

筑後国分尼寺跡（第2次調査）

高倉遺跡（第2次調査、概要報告）

庄屋野遺跡（第10～14次調査、概要報告）

## II. 三反田遺跡（第2次調査）

### 1. 調査に至る経緯

本調査は久留米市荒木町白口で実施した、専用住宅建設に先立つ発掘調査である。令和3年5月21日、土地所有者から久留米市荒木町白口2477-4における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である三反田遺跡に当たり、平成27年度に調査を行った第1次調査地点（注1）の北東約120mに位置する。5月27日の確認調査でも、地表下50cmで遺構を検出した。工事計画では、遺構面と基礎の間に保護層が確保できないほか、市道に面した北半を切土することから、5月28日、土地所有者に対して発掘調査が必要である旨を回答した。6月1日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、6月7日から6月25日まで現地での発掘調査を実施した。対象面積204㎡のうち、調査面積は住宅建築部分と切土部分の119㎡である。

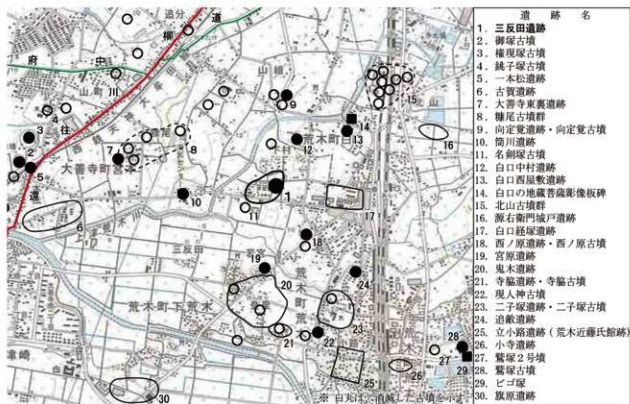
### 2. 位置と環境

久留米市の南東部に聳える耳納山地の西端には、高良山や明星山、飛岳といった標高200～300mの山地が位置する。山地からは丘陵が西方へと延び、広川や上津荒木川、追敷川、白口川などの小河川に開析されて複雑な地形を呈する。三反田遺跡は上津荒木川と白口川に挟まれた丘陵上に立地し、標高は約9mを測る。

付近での最古の遺物は縄文時代まで遡る。北山古墳群で早期の押型文土器、御塚古墳周辺や二子塚遺跡で打製石鏃やスクレイパー、旗原遺跡で打製石鏃や磨製石斧が出土した。明確な遺構は未発見だが、一帯が生活の場として利用されたことが窺える。

弥生時代には、旗原遺跡で早期まで遡る甕棺墓が検出されたほか、古賀遺跡で前期末の土壇墓、宮原遺跡と寺脇遺跡で前期末～中期初頭の溝が見つかった。鬼木遺跡では、V字状の断面を有する前期末～後期初頭の大溝が検出され、環濠の可能性が指摘されている。荒木日吉神社には鬼木遺跡出土の広型銅矛が伝わり、寺脇遺跡からは石戈が出土したことから、寺脇遺跡と鬼木遺跡に大規模な集落があった可能性がある。中期後半には、鬼木遺跡で丹塗土器を伴う土坑が検出されており、寺脇遺跡と西ノ原遺跡、筒川遺跡でも堅穴住居や土坑が確認されたことから、集落の点在を示す。この時期には北部九州で甕棺墓が盛行するが、中期後半から後期初頭には、向定覚遺跡で16基、寺脇遺跡で9基の甕棺墓が確認された。古賀遺跡や筒川遺跡、西ノ原遺跡でも甕棺墓が検出され、寺脇遺跡と宮原遺跡、二子塚遺跡でも甕棺の出土が伝わる。甕棺墓と古賀遺跡の土壇墓、大善寺東裏遺跡と寺脇遺跡の箱式石棺墓の存在は、墓域に伴う未知の集落の存在を示唆する。

古墳時代には、「イロハ塚」と呼ばれるほど多数の古墳が築造されたが、発掘調査が行われた糠尾



第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

古墳群や向定覚古墳、北山古墳群を除き、三反野遺跡の南西約250mにあった名劍塚古墳など大半が調査を経ずに消滅した。現存する古墳は、三重の周濠を有する国史跡の御塚古墳、同じく国史跡の権現塚古墳、直径約10mの円墳である現人神古墳、後円部が残る鷺塚古墳などごく僅かである。古墳群の中心となる首長墓は、御塚古墳（中期後半）、現存しないが円筒埴輪が出土した銚子塚古

墳（後期初頭）、権現塚古墳（後期前半）、明治時代まで残存していた二子塚古墳、変形獣帯文鏡が出土した鷲塚古墳が挙げられ、『日本書紀』に登場する水沼君の系列墓と考えられている。同時期の集落遺跡は、旗原遺跡の6世紀後半～7世紀の集落遺構が目目できる。第2次調査では、26基の竪穴住居と14棟の掘立柱建物が三期以上の変遷を伴い営まれており、第1・3次調査で検出された掘立柱建物や竪穴住居と共に、大規模な集落だったことが窺える。このほか、白口西屋敷遺跡で6世紀の須恵器坏蓋、白口経塚遺跡で6世紀後半の竪穴建物、二子塚遺跡で二子塚古墳の周溝と共に後期の溝や6世紀後半～7世紀前半の総柱建物と竪穴建物、土坑が見つかっており、旗原遺跡の集落や古墳の周辺に、同時期の小集落が点在したことを示す。

古代の荒木町一帯は、『和名類聚抄』の三瀧郡荒木郷に当たる。西ノ原遺跡では多脚円面硯が出土したほか、二子塚遺跡では8世紀の土坑から丹塗の土師器坏や転用硯、石製榑、輪羽口、旗原遺跡で転用硯と刀子が出土した。古賀遺跡では8世紀後半の南北溝が検出されており、輪羽口や古瓦、炭化米が出土した。白口経塚遺跡では、7世紀後半の竪穴建物の柱穴に土師器碗を埋納した遺構や土器焼成遺構が検出されるなど、特異な遺構・遺物の発見が目立つ。三反田遺跡でも、第1次調査で7世紀～8世紀前半の井戸や廃棄土坑から、石製榑や鉄製短刀が出土した。このように、荒木町の古代の遺跡では、硯や榑、刀子の出土が目立つことが特筆できる。7～8世紀の遺構は、白口西屋敷遺跡や源右衛門城戸遺跡、旗原遺跡でも発見されており、集落が点在した様子が窺える。

中世には、『吾妻鏡』文治5年（1189）に荒木村の名があり、三瀧荘に属した。白口の地名は承久3年（1221）の「高良玉垂宮神仏事本定額並新僧番帳」（『御船文書』）が初出で、高良山と玉垂宮の料田が各1町あったという。『御船文書』と『限文書』には、白口村が玉垂宮の祭料米や村田楽、尻巻などを負担する記述がたびたび登場する。13世紀後半、文永の役で功があった近江国の藤原氏が移住し、近藤に姓を改めた。近藤氏の館は立小路遺跡付近にあったと伝わり、11～14世紀の溝や井戸、土坑が検出されている。また、ビゴ塚は近藤備後守の墓と伝わるが、元龜3年（1572）の銘があり、近藤備後守が建立した逆修板碑と指摘されている。『荒木近藤氏文書』の「某秀利知行加増目録」には、某秀利が明応5年（1496）12月21日に近藤次郎三郎に白口の1町を、近藤仲七郎に1町5段を与えたとある。13～15世紀の集落遺跡は古賀遺跡と白口経塚遺跡、二子塚遺跡、白口西屋敷遺跡、追敵遺跡、小寺遺跡で検出されており、旗原遺跡の15世紀前半の土壇墓41基や、同名の豪族の伝承がある源右衛門城戸遺跡、一木但馬守の屋敷があったという白口中村館跡と共に、屋敷や集落の分布が想定できる。なお、応永11年（1404）の銘を有する白口の地藏菩薩彫像板碑は、久留米市周辺に分布する応永地藏板碑の一例として、市の有形民俗文化財に指定されている。また、寺脇遺跡で検出されたV字溝は、天正2年（1574）開基と伝わる浄光寺との関連が窺える。

近世の白口村は、柳川往還（現・県道23号）と府中道、肥後往還（現・国道209号）に挟まれた農村地帯だった。調査地点の西南西約260mに位置する下町の六地藏石塔は、肥前型の六地藏である。紀年銘は無いが、寄進者とみられる安徳喜左右衛門の名があり、江戸時代中期以降の建立とされる。納骨堂の新築に伴い現在地に移設されたが（注2）、現在も地元住民の信仰を集めている。

### 3. 調査の記録

#### （1）調査の経過

今回の発掘調査は、遺跡東部の様相、特に第1次調査地点で検出した7～8世紀の遺構を確認するために行った。令和3年6月7日、重機による表土剥ぎを実施し、並行して座標移動を行った。翌8日に表土剥ぎを続行しつつ現場作業員を投入し、全国最速で猛暑日を記録した6月9日まで、遺構検出を行った。翌10日から、遺構の掘り下げと並行して測量や撮影などの記録を開始した。一帯の水田に水が引かれ、調査地点の遺構も冠水する中、6月24日に高所作業車で全景写真を撮影した。翌6月25日に重機による埋め戻しを行い、器材を撤収して現地での発掘調査を終了した。

#### （2）基本層序

本調査地点の現況は水田で、調査区の北辺は市道の掘方に削平される。調査区東壁中央部の層序



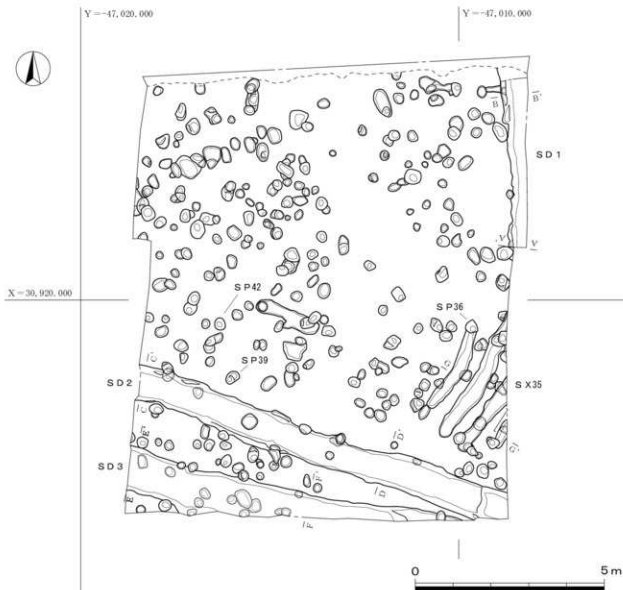
第3図 表土剥ぎ風景（北西から）



第4図 調査風景（南西から）



第5図 調査区全景（南上空から）



第6図 遺構配置図 (1/100)

は、地表下5cmを水稻の根痕や煉瓦、陶磁器、波板などの瓦礫を含む表土(第1層)が覆う。その下に、黄色土ブロックや礫、鉄分を含む灰色の水田耕作土(第2層)が20cmあり、鉄分を含む暗灰黄色の水田床土(第3層)が15cm堆積する。黄色土ブロックや土器片を含む厚さ約20cmの黒褐色土包含層(第4層)を経て、地表下0.5~0.6m、市道とほぼ同じ標高8.0mで地山に至る。遺構は地山面で検出した。地山は、調査区の北半が暗黄褐色土、南半が明黄褐色土で、標高7.9mから下層は浅黄橙色土と淡黄色土である。

### (3) 検出遺構

遺構として、溝3条と畝状遺構1基、ピット多数を検出した。以下、遺構ごとに述べる。

#### 溝

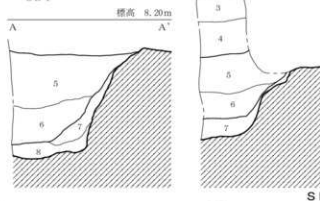
##### SD 1 (第6~9図)

調査区北東部壁際で検出した溝である。溝の東縁と両端は調査区外に及び、西縁の走行方位は、

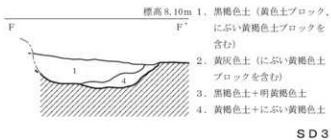
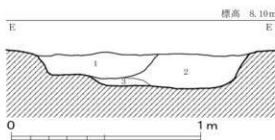
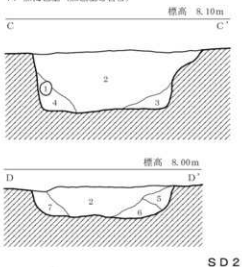


II. 三反野遺跡（第2次調査）

1. 淡黄色土～淡黄色土（瓦礫を含む）表土
2. 灰色土（黄色土ブロック、礫、鉄分を含む）水田耕作土
3. 暗灰色土（鉄分を含む）水田耕作土
4. 黒褐色土（黄色土ブロック、土器片を含む）包含層
5. 暗褐色土（灰黄色土ブロックを含む）SD 1
6. 黒褐色土（淡黄色土ブロックを含む）SD 1



1. 淡黄色土+灰黄色土、樹根痕
2. 黒褐色土（黒色土、にぶい黄褐色土ブロックを含む）
3. 黒褐色土+灰色土
4. 黄灰色土（黒褐色土、灰黄色土ブロックを含む）
5. 明黄色土
6. にぶい黄褐色土（黄色土ブロックを含む）
7. 黒褐色土（黒色土を含む）



第7図 SD 1～3土層図 (1/20)

N-2.5°-8°-Wである。検出したのは長さ4.78mで、北端で上端幅0.74m、下端幅0.48mを測る。溝の断面は逆台形状を呈し、深さは北端で0.58m、南端で0.40mを測り、北に向かって底面の標高が下がる様相が窺える。埋土は第7図のとおりで、上層は暗褐色土や黒褐色土、下層は黄褐色土からなる。堆積状況から、掘り返された可能性がある。遺物は非常に少なく、古代の土師器の坏や甕の細片、丸礫が各1点出土した。

SD 2（第6・7・10～12図）

調査区南部を北西-南東方向に横切る溝である。走行方位はN-71°-Wで、両端は調査区外に及ぶ。検出長10.5m、上端幅0.72～0.97m、下端幅0.53～0.72m、深さは最大で0.39mを測る。溝の断面は、東端から中央部で丸みを帯びた逆台形、西端で歪な逆台形を呈する。埋土は第7図のとおりで、黒色土と黄色を帯びる埋土で占められる。出土遺物は、土師器の坏や甕の細片、古瓦がある。

SD 3（第6・7・10・13図）

調査区南部を北西-南東方向に横切る溝である。走行方位はN-72°-81°-Wで、溝の両端や南



第8図 SD1全景（北から）



第9図 SD1南端土層（北から）



第10図 SD2・3完掘状況（南西上空から）



第11図 SD2中央土層（南東から）



第12図 SD2西端土層（南東から）



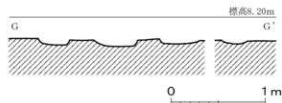
第13図 SD3中央土層（南東から）

部は調査区外に及ぶ。検出したのは7.0mのみで、上端幅1.04～1.17m、下端幅0.87～0.91m、深さは最大で0.28mを測る。溝の断面は丸みを帯びた逆台形である。埋土は第7図のとおりで、黒褐色土と黄色系の下層の埋土が占める。遺物は非常に少なく、土師器の甕胴部と器種不明の細片が各1点出土したのみである。

#### 畝状遺構

##### S X35（第14・15図）

調査区南東部で検出した、4基の細長いピットからなる遺構である。複数のピットが後出し、遺



第14図 S X35断面図 (1/40)

構の東部は調査区外に及ぶ。ピットは残存長0.74～3.73m、幅0.28～0.51m、深さ0.08～0.15mを測る。埋土は、にぶい褐色土ブロックを含む暗褐色土が占める。道路遺構に伴う波板状凹凸面の可能性もあるが、硬化面が無く、埋土に礫が含まれていない。さらに埋土やピットの底面などに固く締まった様相が無いことから、畑に伴う畝状遺構と判断した。出土遺物は、土師器の坏や甕の細片、須恵器の甕の胴部片がある。

### (3) 出土遺物（第16～18図、第2表）

出土遺物は総じて少なく、その合計はパンコンテナー0.5箱分である。古代の土師器と須恵器が大半を占め、古瓦や表土から出土した近世以降の陶磁器、SD1出土の丸礫が含まれる。出土遺物の一覧は第2表を参照いただきたい。以下、各遺物の特徴について簡単に補足する。

1はSD1から出土した土師器の坏である。底部の破片で、摩耗しているがへら切り底と見られる。2～5はSD2出土遺物で、2は土師器の坏、3と4は甕の口縁部の細片である。5は平瓦で、摩耗するが、凸面に格子文叩き2類の斜格子叩きを施す。6～8はS X35出土遺物である。6は土

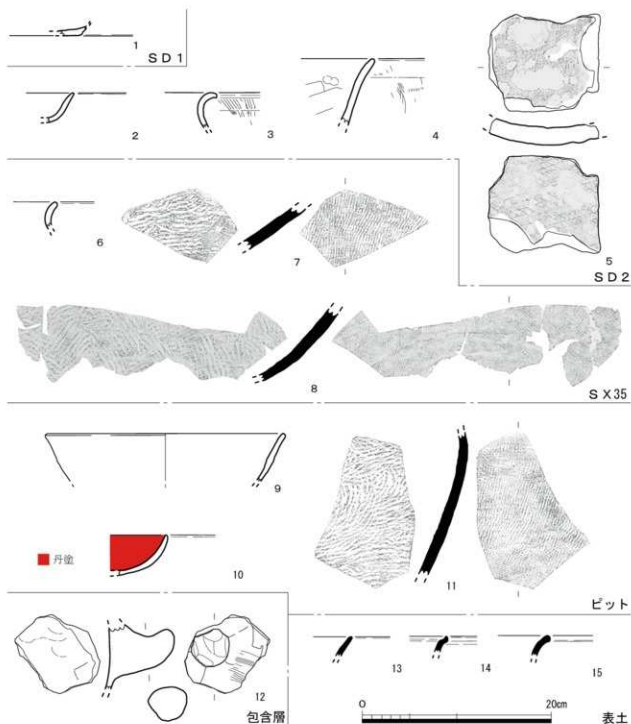


第15図 S X35 完掘状況 (南東から)

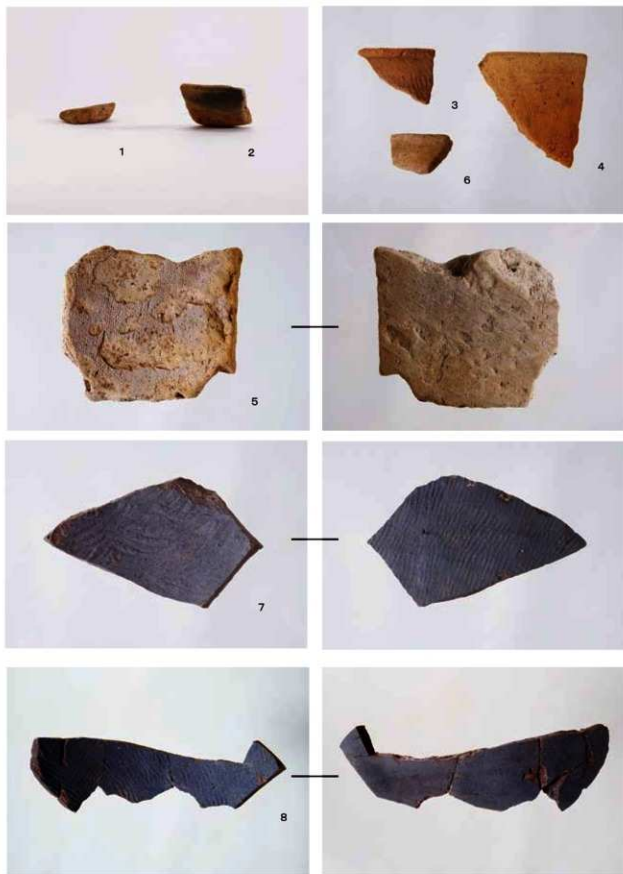
第2表 三反野遺跡第2次調査出土遺物観察表

遺物 No.	出土遺構	種別	形状	寸法 (mm)			色 調		装 飾 文 様		出 土	備 考	登録番号
				口径 (mm)	底径 (mm)	厚み (mm)	外面(凹面)	内面(凸面)	外面 (凹面)	内面 (凸面)			
1 第16-17図	SD1	土師器	坏	—	—	(1.0)	褐色	にぶい褐色	工具ナゲ へら切り	磨粒	須良 (須恵砂、雲母 を含む)	北沢片	202110 000091
2 第16-17図	SD2	土師器	坏	—	—	(3.1)	褐色～ 赤褐色	褐色	回転ナゲ 磨粒	回転ナゲ 磨粒	砂粒、雲母、 灰層片を含む	川原底片 外面に黒陶	202110 000004
3 第16-17図	SD2	土師器	甕	—	—	(3.7)	褐色	にぶい褐色	回転ナゲ 刷毛目	回転ナゲ ケズリ	須良 (赤粘子、黒色 粘子、雲母を含む)	川原底片 外面に黒陶	202110 000003
4 第16-17図	SD2	土師器	甕	—	—	(7.0)	明黄褐色～ 褐色	明黄褐色～ 暗灰色	回転ナゲ ケズリ	刷毛ナゲ オサキ	須良 (砂粒、 雲母を含む)	川原底片 内面黒陶	202110 000005
5 第16-17図	SD2	古瓦	平瓦	(10.4)	(11.8)	1.8	明黄褐色～ 灰黄褐色	明黄褐色～ 灰黄褐色	刷毛目 斜格子	斜格子 斜格子	須良 (須恵砂、雲母 を含む)	川原底片	202110 000006
6 第16-17図	S X35 P.2	土師器	甕	—	—	(2.9)	明黄褐色	にぶい黄褐色	回転ナゲ 磨粒	回転ナゲ 磨粒	須良 (須恵砂、雲母 を含む)	川原底片	202110 000012
7 第16-17図	S X35 P.1	須恵器	甕	—	—	(4.3)	灰色	灰色	平行文叩き	青黄泥文 叩き	須良 (須恵砂を含む)	8と同一 須良片	202110 000009
8 第16-17図	S X35 P.1	須恵器	甕	—	—	(7.6)	灰色	灰色	平行文叩き 赤キ目	青黄泥文 叩き	須良 (須恵砂、雲母 を含む)	7と同一 須良片	202110 000008
9 第16-18図	S P39	土師器	鉢	(25.0)	—	(5.1)	褐色～ 赤褐色	褐色～ 赤褐色	横ナゲ 磨粒、磨熟	横ナゲ 磨粒、磨熟	砂粒、雲母を含む	川原底片	202110 000014
10 第16-18図	S P42	土師器	坏	—	—	(4.2)	淡黄褐色	赤褐色	回転ナゲ 磨粒	回転ナゲ	須良砂粒、雲母、 灰層片を含む	内面丹塗	202110 000015
11 第16-18図	S P36	須恵器	甕	—	—	(15.0)	灰色	灰色	平行文叩き 赤キ目	青黄泥文 叩き	須良 (須恵砂を含む)	—	202110 000013
12 第16-17図	包含帯	土師器	把手	(8.3)	(9.6)	3.4	にぶい褐色～ にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刷毛目 オサキナゲ	オサキ ナゲ	砂粒、雲母を含む	—	202110 000016
13 第16-17図	表土	須恵器	坏	—	—	(2.0)	黄灰色	灰色	回転ナゲ	回転ナゲ	須良 (須恵砂、黒色 粘子を含む)	川原底片	202110 000018
14 第16-17図	表土	須恵器	甕	—	—	(1.6)	灰色	灰色	回転ナゲ	回転ナゲ	須良	川原底片	202110 000017
15 第16-18図	表土	須恵器	甕	—	—	(2.1)	灰白色	灰白色	回転ナゲ	回転ナゲ	須良 (須恵砂、黒色 粘子を含む)	川原底片	202110 000019

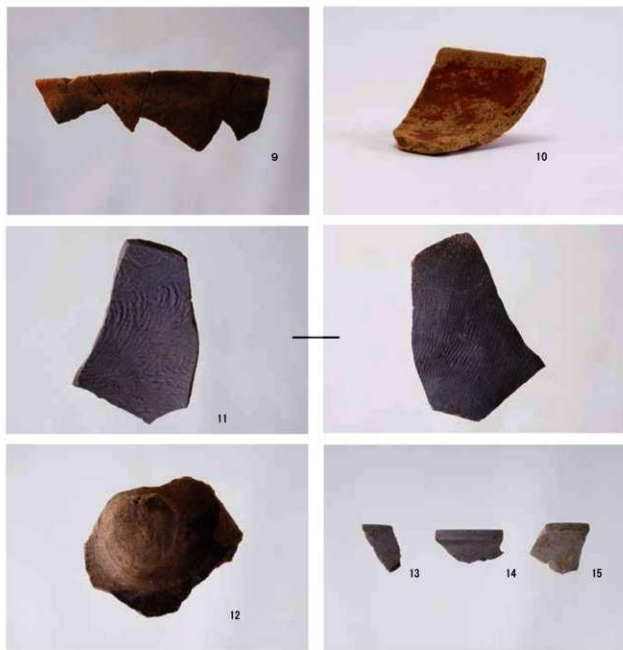
師器の甕の口縁部で、摩耗が著しい。7と8は、須恵器の甕の胴部である。文様や色調が同じで同一個体の可能性が高いが、接合しないため別個の遺物として報告する。9～11はビットからの出土遺物である。9と10は土師器で、9は外面に黒斑、10は内面に丹塗が残る。11は須恵器の甕の胴部片で、7～8に類似する。12は包含層出土の把手で、外面の一部は煤で黒変する。13～15は表土からの出土遺物である。いずれも須恵器の口縁部の細片で、13は坏、14と15は甕だが、14は高坏の脚部の可能性がある。



第16図 出土遺物実測図 (1/4)



第17圖 出土遺物写真1



第18図 出土遺物写真2

#### 4. 総括

三反田遺跡では、第1次調査地点で7世紀から8世紀前半の遺構が見つかったほか、昭和25年（1950）頃に福岡学芸大学（現・福岡教育大学）久留米分校が発掘調査を行い、古代の竪穴建物が検出された記録がある（注3）。今回の調査で検出した遺構の年代も、古代に収まると考えられる。

その詳細な年代だが、SD1・3は出土遺物に乏しく不明瞭である。SD3は荒木町一帯の条里の主軸N-6°-E（注4）に直交することから、条里制もしくは条里制以降の土地区画に伴う、東

西方向の溝の可能性がある。SD 2からは、古代の土器や古瓦が出土した。古瓦は大善寺遺跡でも出土しており（注5）、斜格子目叩きの平瓦は大善寺遺跡第7次調査で出土した（注6）。さらに、古賀遺跡で出土した丸瓦の細片は、八女市の牛焼谷窯跡で焼成され、7世紀後半に広川沿いの官衙・寺院に供給されたと指摘されている（注7）。三反野遺跡では、第1次調査で刀子や石製槌といった遺物が出土しており、計量を行う人物がいたことが指摘されている。混入や搬入なども想定できるが、古瓦の出土は、周囲に公的施設が存在することを示唆する。

このほか、ピットから出土した内面丹塗の坏（第16・18図10）は、白口経塚遺跡（注8）や旗原遺跡（注9）で出土した土師器坏に類似する。その年代は7世紀まで遡ると考えられ、白口経塚遺跡や旗原遺跡、二子塚遺跡で見つかった遺構との関連が示唆される。

なお、調査地点が位置する水田は6区画の宅地として開発されたが、調査地点を除く5区画は、いずれも調査成果を元に保護層が確保され、保存調整を実施している。（西）

【注】

- (1) 久留米市教育委員会『三反野遺跡 一第1次発掘調査概要報告一』久留米市文化財調査報告書第373集 平成28年  
久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査集報XVIII』久留米市文化財調査報告書第397集 平成30年
- (2) 久留米市教育委員会『白口の民俗資料』久留米市文化財調査報告書第4集 昭和47年
- (3) 筑邦町『筑邦町誌』 昭和40年  
なお、上記の文献には具体的な調査地点が示されていないが、筑邦町当時の字図を元にした遺跡分布地図（西町文化財整理事務所蔵）には、第2図に示した場所に赤鉛筆で「ハジ住居址」と加筆されている。
- (4) 楠一成「筑後河南の集里制」久留米市史編さん委員会・編『久留米市史』第1巻 久留米市 昭和56年 P.453
- (5) 久留米市教育委員会『第3回考古資料展』 昭和52年  
久留米市教育委員会『大善寺北部地区遺跡群VI』久留米市文化財調査報告書第129集 平成9年
- (6) 久留米市教育委員会『大善寺遺跡II』久留米市文化財調査報告書第137集 平成10年
- (7) 久留米市教育委員会『筑後国三瀬郡古賀遺跡第1・2次調査』久留米市文化財調査報告書第305集 平成23年
- (8) 久留米市教育委員会『白口経塚遺跡 一第4・5・6次調査一』久留米市文化財調査報告書第147集 平成10年
- (9) 久留米市教育委員会『旗原遺跡 一第2次調査一』久留米市文化財調査報告書第171集 平成13年

## Ⅲ. ヘボノ木遺跡（第75次調査）

### 1. 調査に至る経緯

本調査は久留米市東合川三丁目で実施した、専用住宅建設に先立つ発掘調査である。令和3年10月22日、土地所有者から久留米市東合川三丁目12番17における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地であるヘボノ木遺跡に位置し、第20図のとおり周囲でも発掘調査を実施した場所である。11月13日の確認調査でも、現地表下65cmで遺構を検出した。工事計画では盛土を施すため、遺構面と基礎の間に保護層が確保できるが、基礎杭が遺構面に到達することから、11月10日、土地所有者に対して発掘調査が必要である旨を回答した。

令和4年1月17日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、2月7日から3月11日まで現地での発掘調査を実施した。対象面積296㎡のうち、調査面積は住宅部分の85㎡である。

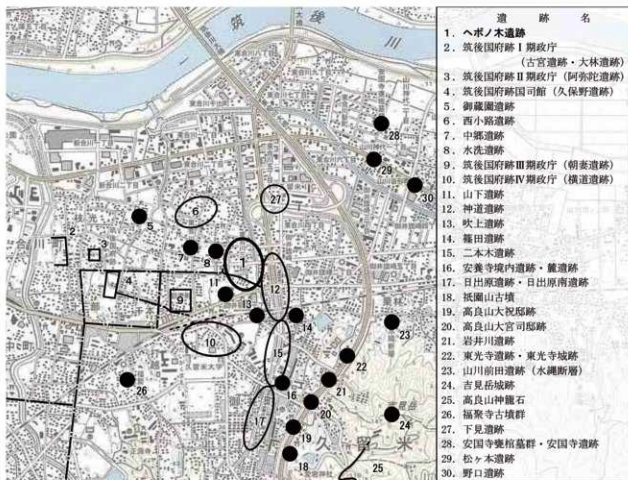
### 2. 位置と環境

久留米市は筑紫平野の中心部に位置し、筑後川の中・下流域に面する。久留米市の南東部に聳える耳納山地の西端には、高良山や明星山、飛岳といった標高200～300mの山地が位置する。高良山からは北西に向かって丘陵が派生しており、標高を減じながら段丘崖を経て、筑後川左岸の氾濫原に至る。ヘボノ木遺跡はこの丘陵の北部、南を段丘崖に、東西を中谷川と井田川に挟まれた、標高約13～14mの低位段丘から氾濫平野の上に位置する。

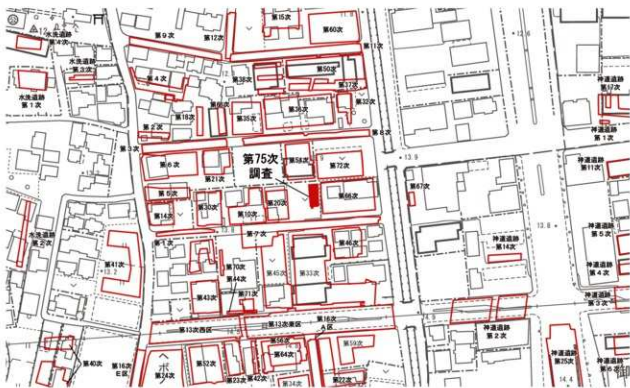
ヘボノ木遺跡の人類の足跡は旧石器時代まで遡り、ナイフ形石器が表採されている。縄文時代には、横道遺跡で草創期まで遡る土器が出土したほか、大林遺跡やヘボノ木遺跡、山下遺跡、水洗遺跡、篠田遺跡、吹上遺跡、安国寺遺跡、松ヶ本遺跡、野口遺跡で土器や石製品が出土した。さらに、第74次調査で竪穴建物や埋甕が見つかったほか、横道遺跡では早期の土坑や集石遺構、朝妻遺跡と神道遺跡で埋甕、西小路遺跡で竪穴住居と土坑群、篠田遺跡と野口遺跡で土坑が確認され、高良山の麓から筑後川にかけて集落があったことを示す。なお、西小路遺跡で出土した石棒や石冠は、精神文化や東日本との交流を考える上で注目できる。

弥生時代には、第47次調査で夜臼式土器の埋設遺構が検出されたほか、前期の土器が第73次調査や神道遺跡、下見遺跡で出土した。中期後半には、ヘボノ木遺跡の南部から神道遺跡で竪穴建物や土坑が分布する。竪穴建物には火災痕跡を有する住居もあり、祭祀土坑を伴う。中期後半の集落遺跡は、久保野遺跡や朝妻遺跡、篠田遺跡、二本木遺跡にもあり、中谷川の対岸には安国寺甕棺墓群が位置することから、さらなる集落の存在が示唆される。後期後半には、古宮遺跡と大林遺跡でV字溝を伴う竪穴建物群と甕棺墓が検出され、銅鏡片や鉄鏃が出土した。同時期には、ヘボノ木遺





第19図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第20図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

跡でも竪穴建物が見られ、楽浪系土器(注1)や素環頭刀子、銅鏡片が出土したほか、朝妻遺跡では舶載鏡の破鏡が出土した。台地西端の大規模な集落の東方に、中郷遺跡や朝妻遺跡、ヘボノ木遺跡の小規模な集落が点在する様子が窺える。古墳時代には、弥生時代終末期の甕棺墓を伴い、筑後地方最古の古墳と考えられる祇園山古墳や、方墳群である福聚寺古墳群が造営される。また、筑後国府跡三反野地区で後期の竪穴建物群が検出されており、古墳と同時期の集落の存在が示唆される。

古代に入ると、高良山に神籠石式山城が築かれる。その築造年代は明らかではないが、白村江の戦により対外防衛の必要に迫られた7世紀頃に築かれたと考えられている。高良川沿いの丘陵西端でも、同時期の大型建物や大溝が検出されており、国府設置前の公的施設—いわゆる「前身官衙」—とされている。前身官衙は7世紀末までに成立した筑後国の国府に継承されたとみられ、古宮地区には築地塀を伴う建物群がみられる。筑後国府跡や神道遺跡、山川前田遺跡では、この時期に比定される断層や噴砂痕が確認されている。『日本書紀』巻第二十九には、天武天皇7年(678)12月に筑紫国で大地震が起きたという記述があり、耳納山地北麓の水縄断層が震源とされている。これらの地震痕跡は、この「筑紫地震」の影響と考えられている。

筑後国府は、7世紀末から12世紀後半にかけて古宮地区から阿弥陀地区、朝妻地区、そして横道遺跡を三遷しており、310次を越える発掘調査から、筑後国における政治経済の中心的な役割を担ったことが判明している。山下遺跡では、7～9世紀の溝や土坑から緑釉陶器の香炉蓋や複数の越州窯系青磁碗が出土しており、『高良記』に登場する在国司居屋敷との関連が指摘されている。ヘボノ木遺跡では、8世紀中頃～9世紀前半に四面廂建物と八脚門、方形周溝を伴う回廊状遺構が造営される。これらの遺構は数回の建て替えが確認されており、その性格は御井郡衙とする説と、寺院とする説がある(注2)。なお、筑後国府跡からヘボノ木遺跡にかけては、東西に走る道路が検出されている。この道路はヘボノ木遺跡で二手に分かれ、一方は大宰府へ向かう推定駅路、もう一方は山本・竹野・生葉郡へ向かう伝馬道とされている。同時期の集落遺跡は、ヘボノ木遺跡の北東部に7世紀後半～8世紀中頃の竪穴建物群が分布し、久保野遺跡や山下遺跡、神道遺跡、篠田遺跡、二本木遺跡でも8～9世紀の竪穴建物、吹上遺跡で10～11世紀の掘立柱建物が検出された。また、西小路遺跡では方形区画溝を伴う10～11世紀の掘立柱建物群が発見され、屋敷の存在が示唆される。

11世紀末に筑後国府が朝妻遺跡から横道遺跡に移転したことに伴い、主要道も高良山麓の街道—後の薩摩街道へ移ったと考えられている。ヘボノ木遺跡の伝馬路は11世紀まで存続するが、12世紀には井戸や土坑、土壇墓が点在するのみとなる。隣接する西小路遺跡も土壇墓が点在するだけだが、山下遺跡では12世紀の溝や土坑が検出されており、筑後国府跡の区画溝や下見遺跡の13世紀の館跡と共に、丘陵上に居館が点在したことを示唆する。高良山麓では、二本木遺跡で10～11世紀に遺構が増加し、今日では薩摩街道と呼ばれている街道の下限を示す。12～13世紀には篠田遺跡や二本木遺跡、岩井川遺跡、安養寺境内遺跡、麓遺跡、日出原遺跡、日出原南遺跡、高良山大祝邸跡、高良山大宮司邸跡で溝や井戸、地下式坑などの土坑が多数検出されており、街道沿いや高良大社の門前に今日の御井町に至る集落があったことが窺える。

### 3. 調査の記録

#### （1）調査の経過

今回の発掘調査は、遺跡北東部の様相、特に周辺の第7・20・54・66・72次調査などで検出された遺構との関係を確認する目的で行った。なお排土置場を確保するため、調査区は南北で二分した。

令和4年2月7日、重機で調査区北部の表土剥ぎを実施した。翌8日から発掘作業員を投入し、遺構検出と座標移動を行い、遺構の掘り下げと並行して測量や撮影などの記録を開始した。2月18



第21図 表土剥ぎ風景（北西から）



第22図 調査風景（北から）

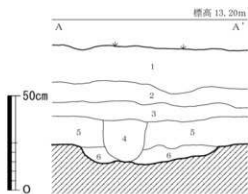


第23図 調査区北西壁面土層（南から）

日に高所作業車で調査区北部の全景写真を撮影し、2月24・25日に調査区南北の反転を行った。調査区南部は2月28日に遺構検出を行い、同日から遺構の掘り下げと記録を開始した。3月7日に高所作業車で調査区南部の全景写真を撮影した後、調査区の拡張や追加の測量などを経て、3月10日に重機による埋め戻しを行った。翌3月11日に器材を撤収し、現地での発掘調査を終了した。

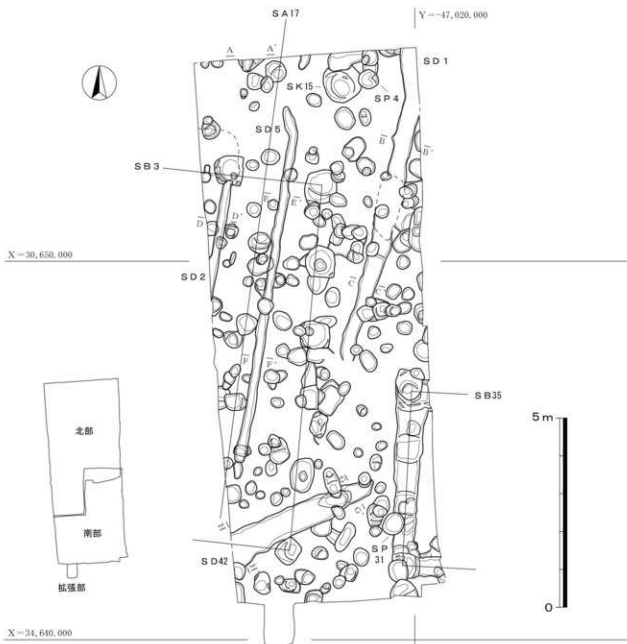
#### （2）基本層序

本調査地点の現況は畑地だった。調査区北西部壁面の層序（第23・24図）は、砂利を含む灰黄褐色土（第1層）が地表下20cmを覆う。その下に、礫を含む暗灰黄色土（第2層）と、水田床土とみられる鉄分を含むにぶい黄褐色土（第3層）



1. 灰黄褐色土（砂利を含む）表土
2. 暗灰黄色土（砂利、礫を含む）
3. にぶい黄褐色土（砂利、鉄分を含む）床土か
4. 黄灰色土（砂利を含む）しまり普通。ピット
5. にぶい黄色土＋灰黄褐色土（砂利、礫を含む）
6. にぶい黄褐色土（明黄褐色土を含む）ピット

第24図 調査区北西部壁面土層図（1/20）



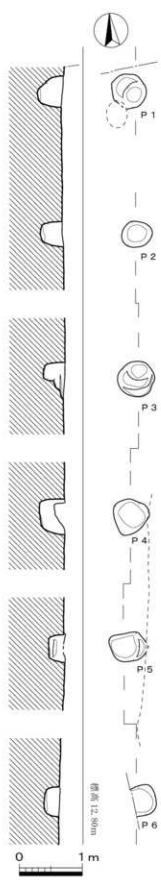
第25図 遺構配置図 (1/100)



第26図 調査区北部全景 (西上空から)



第27図 調査区南部全景 (西上空から)



第28図 SA17実測図 (1/60)



第29図 SA17完掘状況 (西上空から)

が各10cm堆積する。SD 2 など一部の溝は、この層の直下で確認した。礫を含むにぶい黄色土と灰黄褐色土の層 (第5層) を経て、地表下0.5～0.6m、標高12.4～12.5mで地山に至る。遺構は地山面で検出した。地山は、標高12.2～12.4mから上層が橙色土や明黄褐色土、下層がにぶい黄色や黄色の砂質土である。いずれも大量の礫を含み、透水性が高い。

### (3) 検出遺構

遺構として、柵列1条と掘立柱建物2棟、溝5条、土坑1基、ピット多数を検出した。以下、遺構ごとに述べる。

#### 柵列

##### SA 17 (第28・29図)

調査区西部で検出した遺構である。検出したのは南北方向の5間で、SD 5 が後出するほか、両端は調査区外におよぶ可能性がある。主軸方位はN-7.5° - E、心芯距離は2.1～2.4mを測る。柱穴は直径0.41～0.59m、深さ0.27～0.42mを測る。遺物は、P 3～5から土師器の坏類や甕胴部の細片が出土した。

#### 掘立柱建物

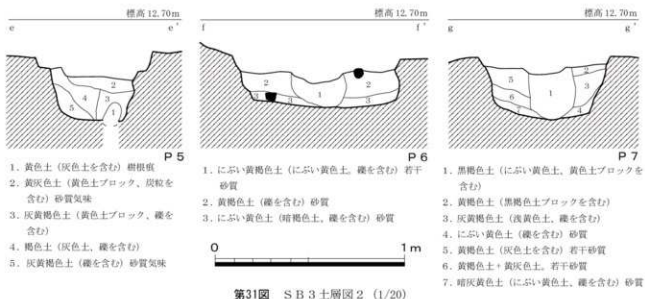
##### SB 3 (第30～35図)

調査区西部で検出した遺構である。北辺にあたる東西1間 (P-1・2) と、建物の東辺にあたる南北5間 (P 2～7) を検出した。調査区南端を拡張したが、南方に続く柱穴は無かったため、柱穴の続きは調査区西方に及ぶとみられる。南北方向の主軸方位はN-5° - Eで、心芯距離は南北方向が1.7～2.1m、東西方向は2.4mを測る。柱穴は歪な楕円形から隅丸方形の平面を有し、直径0.49～0.89m、深さ0.27～0.42mを測る。P 5以外は複数の底面を有し、最も深いP 1の深さは、堀方の上端





III. ヘボノ木遺跡 (第75次調査)



第32図 SB 3北部全景 (北西上空から)



第33図 SB 3南部全景 (北西上空から)



第34図 SB 3 P1土層 (南西から)



第35図 SB 3 P7土層 (北西から)

から0.62mを測る。埋土は、黄色や灰色、黒褐色の砂質気味の粘質土からなり、炭粒や礫を含む。また、柱痕または柱拔取痕が観察できた。出土遺物は、P 4出土の土師器の甕胴部片と、P 7掘方から出土した弥生土器の細片各1点のみである。

S B 35 (第36~38図)

調査区南東部壁際で検出した、コの字状の平面形を有する遺構である。遺構検出の段階では溝と

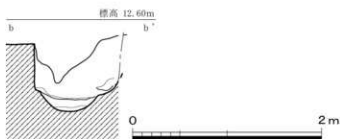
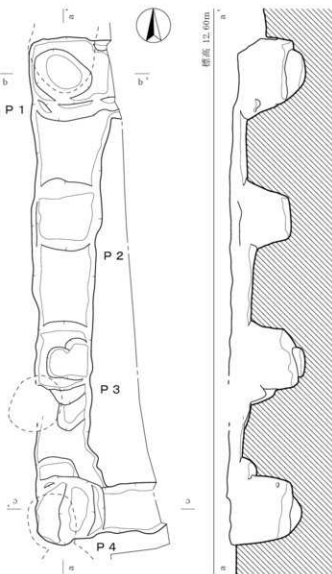
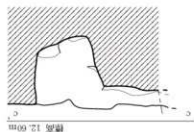


第36図 SB35完掘状況（西上空から）



第37図 SB35土層（北から）

掘削したが、後述するように布掘り基礎に類似する堀方であることから、掘立柱建物とした。南北方向の主軸方位は $N-3^{\circ}-E$ で、堀方の長さは5.34m、幅は0.55~0.84mを測る。東西方向は最大で1.39mを検出し、東半は調査区外に及ぶ。溝の底面には4基の柱穴が心芯距離1.5~1.6m間隔で並ぶ。P2以外は複数の底面を有し、最も深いP1の深さは、堀方の上端から0.40mを測る。埋土は、上層の溝が黄色土ブロックと礫を含む砂質の黒褐色土と黄褐色土で、下層の柱穴は黒褐色と黄色の粘質土で占められる。遺物は、上層の溝から弥生土器の細片と土師器の坏や鉢、甕、把手、須恵器の坏蓋、平瓦が出土し、柱穴からは土師器の坏や甕などの細片、粘土片が出土した。



第38図 SB35実測図 (1/40)



溝

SD 1 (第25・39~41図)

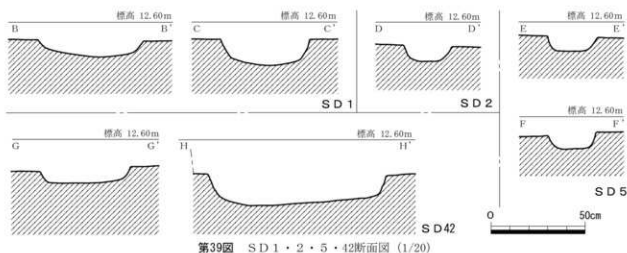
調査区北東隅から中央部で検出した溝である。溝の北端は調査区外に及び、南端は削平されて消滅する。西縁の走行方位は $N-4^{\circ}-W \sim N-15^{\circ}-E$ で、検出長は8.53mを測る。溝の断面は丸みを帯びた台形で、上端幅0.38~0.55m、下端幅0.28~0.46m、深さは北端で0.18m、南端で0.13mを測り、底部は南に向かって標高を減じる様相が窺える。埋土は、橙色土ブロックや礫を含む灰色土が占める。出土遺物は、土師器の坏や甕の細片が各1点出土した。

SD 2 (第25・39・42図)

調査区西部壁際で検出した溝である。北端はSB 3に後出する。走行方位は $N-10^{\circ}-E$ で、南端は調査区外に及び、検出長3.22mを測る。溝の断面は丸みを帯びた逆台形状を呈し、上端幅0.21~0.26m、下端幅0.11~0.21m、深さ0.12mを測る。埋土は礫を含む灰色土で占められる。遺物は出土していない。

SD 5 (第25・39・43図)

調査区西部で検出した溝である。SA 17や複数のピットに後出する。走行方位は $N-19^{\circ}-W \sim N-10^{\circ}-E$ で、北端は若干西に偏る。長さ9.47m、上端幅0.20~0.27m、下端幅0.14~0.19m



第40図 SD 1完掘状況 (南西から)



第41図 SD 1北端土層 (南西から)



第42図 SD 2・5完掘状況（南西から）



第43図 SD 5中央土層（南西から）



第44図 SD 42完掘状況（北東から）



第45図 SD 42土層（北東から）

を測る。溝の断面は逆台形で、深さは最大で0.19mを測る。埋土は、橙色土や礫を含む灰黄褐色土が占める。出土遺物は、土師器の坏とみられる細片1点のみである。

#### SD 42（第25・39・44・45図）

調査区南西部で検出した溝である。複数のピットのほか、SB 3がわずかに後出する。走行方位はN-64° - Eで、西端は調査区外に及ぶため、検出したのは4.3mである。溝の断面は歪な逆台形で、上端幅0.42~1.03m、下端幅0.34~0.86m、深さは最大で0.27mを測り、底部は西に向かって標高を減じる。埋土は、明黄褐色土と黄色土ブロック、炭粒を含む灰褐色土と暗褐色土で占められる。遺物は、土師器の坏や皿、黑色土器A類の細片、古瓦が出土した。

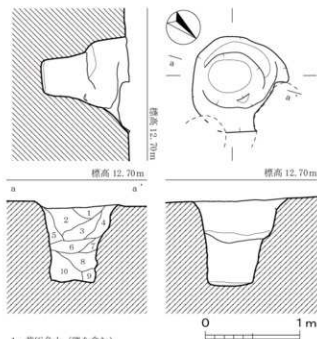
#### 土坑

#### SK 15（第46・47図）

調査区北東部で検出した土坑である。複数のピットが後出するが、歪な円形の平面を有し、直径1.02~1.05mを測る。底面は複数の段を有し、深さは最大で0.93mを測る。埋土は土層図のとおりで、灰黄色系のやや砂質気味の埋土が占める。



第46図 SK 15完掘状況（東から）



1. 黄灰色土 (礫を含む)
2. 黄灰色土+灰黄色土 (黄色土ブロック、礫を含む) やや砂質
3. 暗灰黄色土 (黄色土ブロックを含む) やや砂質
4. にぶい黄色土 (黄色土ブロックを含む) やや砂質
5. 黄褐色土 (淡黄色土ブロックを含む) やや砂質
6. 暗灰黄色土 (黄色土ブロックを含む) やや砂質
7. 灰黄色土 (黄色土ブロックを含む) やや砂質
8. 暗灰黄色土 (黄色土ブロックを含む) やや砂質
9. 灰黄褐色土、やや砂質
10. 暗灰黄色土 (淡黄色土を含む) やや砂質

第47図 SK15実測図・土層図 (1/40)

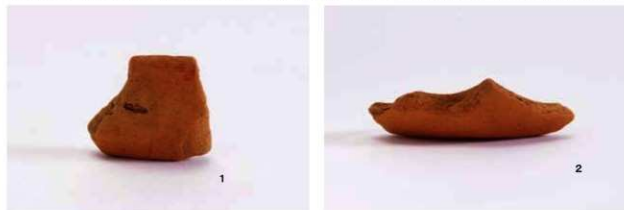
7は内面に油煙が付着する。8はP4出土の土師器甕の口縁部片で、外面に若干煤が付着する。9～11はSD42出土遺物である。9は土師器坏の底部、10は丸瓦で、凸面のみ残存する。11は摩耗著しい平瓦で、縄目文叩きを施す。12と13は、SK15出土遺物である。12は土師器の坏の口縁部で、外面に門歯痕が残る。13は鉄製品で、木質が残り、断面がクサビ状を呈することから、刀子の茎とみられる。14と15はビットから出土した土師器の坏である。14は色調や調整が12に類似し、SK15に後出するSP4から出土したことから、同一個体の可能性がある。15はSB35に後出する

遺物は非常に少なく、土師器の坏の破片や、刀子とみられる鉄片、丸瓦が各1点のみ出土した。

(3) 出土遺物 (第48～51図、第3表)

出土遺物は非常に少なく、その総量はビニール袋3袋分である。古代の土師器が大半を占め、弥生土器や黒色土器A類、須恵器、古瓦、陶磁器、鉄製品が含まれる。出土遺物の一覧は第3表を参照いただきたい。以下、各遺物の特徴について簡単に補足する。

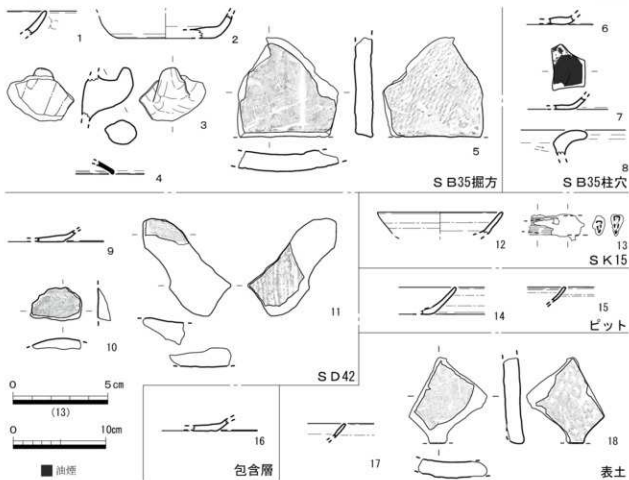
1～8はSB35出土遺物である。1～5は、溝状の掘方から出土した。1～3は土師器である。1は坏の口縁部で、外面に初圧痕が残る。2は、底部の厚さから鉢と判断した。3は把手で、黒斑や煤が見られない。4は須恵器で、坏蓋の口縁部である。今回の調査で出土した須恵器は、この坏蓋と対象地入口の碎石に混入していた甕の胴部片のみである。5は平瓦で、凸面は縄目文叩きを施してスリ消す。6と7はP3から出土した土師器坏の底部で、



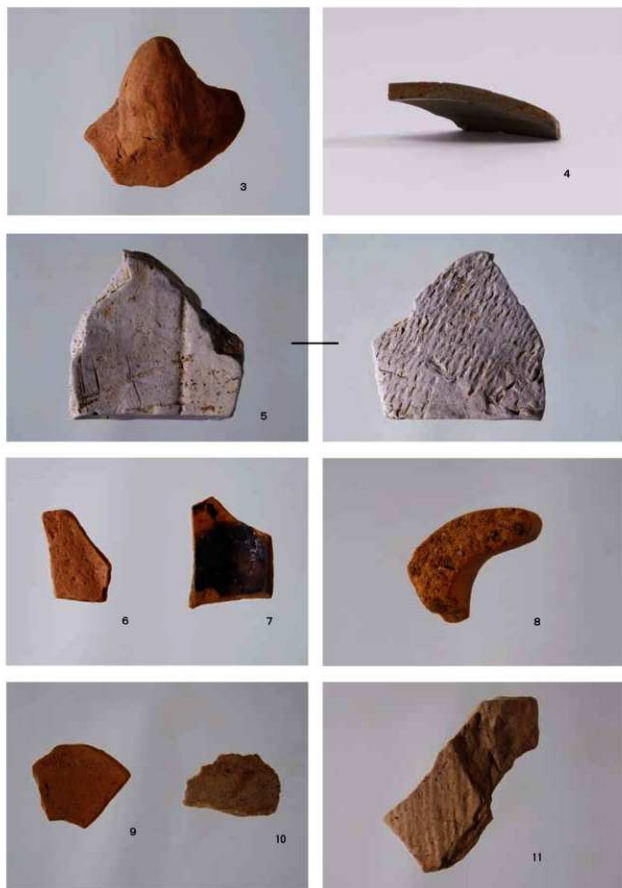
第48図 出土遺物写真1

第3表 ヘボノ木遺跡第75次調査出土遺物観察表

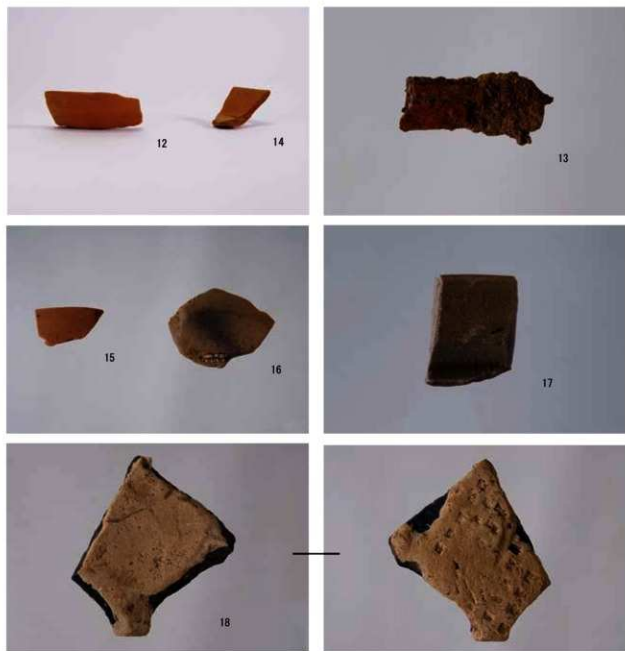
遺物 No.	出土遺跡	種類	形状	尺 寸 (cm)			色 澤		器 質・文 様			出土・位置	備 考	発掘年	
				口径	高さ 幅	長さ 厚	内面 (口内、裏面)	外面 (口外、表上)	外壁 (口縁)	内面 (口内)	底面・側面				
1	S B35 掘方	土師器	杯	—	—	(3.3)	褐色	回転ナズ オサム	回転ナズ	—	—	焼灰	付録表片	2021.16 000014	
2	S B35 掘方	土師器	杯	—	[14.4]	(2.4)	褐色	回転ナズ	回転ナズ	ヘラ跡あり	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000016	
3	S B35 掘方	土師器	肥子	(5.4)	(7.1)	2.5	褐色	回転ナズ	ナズ	—	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000019	
4	S B35 掘方	土師器	杯	—	—	(3.3)	灰白色 ～灰色	回転ナズ	回転ナズ	—	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000027	
5	S B35 掘方	土師器	平瓦	(14.5)	(14.65)	2.8	白色～灰白色	布目 織物	織物文 様あり	—	—	焼灰	付録表片	2021.16 000049	
6	S B35 P.3	土師器	杯	—	—	(9.95)	褐色	回転ナズ	ナズ	ヘラ跡あり	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000070	
7	S B35 P.3	土師器	杯	—	—	(3.3)	褐色～ 灰白色	回転ナズ	回転ナズ 表面打穿	ヘラ跡あり	—	焼灰	付録表片	2021.16 000076	
8	S B35 P.4	土師器	杯	—	—	(2.7)	褐色	回転ナズ	回転ナズ クボミ	—	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000077	
9	S D42	土師器	杯	—	—	(3.2)	灰白色～ 褐色	回転ナズ	回転ナズ	—	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000078	
10	S D42	土師器	平瓦	(14.3)	(14.3)	(3.4)	淡黄褐色	布目 織物	織物文様 入り	—	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000079	
11	S D42	土師器	平瓦	(11.5)	(5.4)	(1.4)	淡黄褐色	布目 織物	ナズ	—	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000082	
12	S K15	土師器	杯	[13.2]	—	(3.3)	褐色	回転ナズ	回転ナズ	—	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000083	
13	S K15	土師器	刀子	(2.4)	2.2	8.65	暗褐色	木炭焼色	—	—	—	(3.3) g	付録表片	2021.16 000084	
14	S P.4	土師器	杯	—	—	2.85	黄褐色	褐色	回転ナズ	回転ナズ	ヘラ跡あり	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000085	
15	S P.31	土師器	杯	—	—	(1.4)	褐色	回転ナズ	回転ナズ	—	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000086	
16	S P.31	土師器	杯	—	—	(3.3)	灰白色～ 褐色	回転ナズ	回転ナズ	ナズ	ヘラ跡あり	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000087	
17	表土	土師器	杯	—	—	(1.5)	灰白色	回転ナズ	回転ナズ 胎土	—	—	焼灰	付録表片	2021.16 000088	
18	表土	土師器	平瓦	(14.1)	(6.2)	1.75	淡黄褐色	淡黄褐色	布目 織物	格子文様 入り	ヘラ跡あり	—	焼灰 (1色) 灰子を含む	付録表片	2021.16 000089



第49図 出土遺物実測図 (1/4、1/2)



第 50 図 出土遺物写真 2



第51図 出土遺物写真3

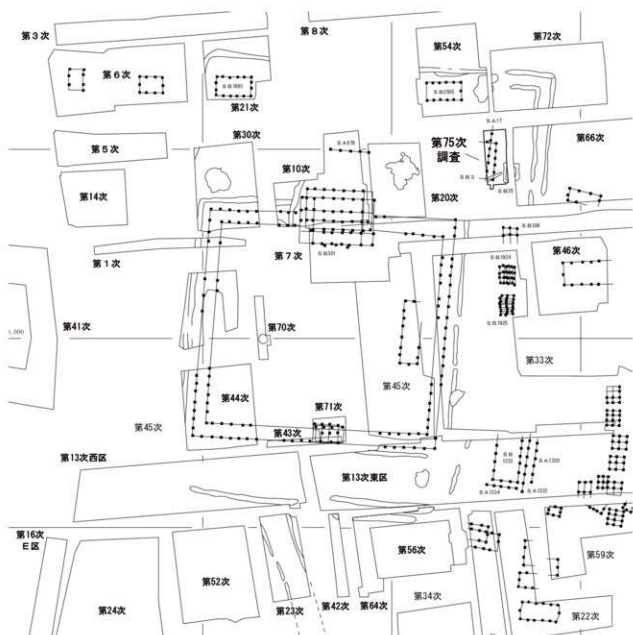
るSP31から出土した。口縁部片で、端部に門歯痕が見られる。16は包含層から出土した、土師器の坏の底部片である。外面底部に黒斑が残り、内面に門歯痕が残る。17と18は、表土からの出土遺物である。17は貿易陶磁器の口縁部片で、龍泉窯系または同安窯系の青磁皿Ⅰ-1類と考えられる。18は平瓦で、摩耗著しいが、凸面に格子文1類の叩きを施す。

#### 4. 総括

ヘボノ木遺跡では、今回を含め75次の発掘調査が実施された。遺跡の中央地区では第52図のと

おり、第7・10次調査で検出された四面廂建物SB301を中心に、回廊や周溝、総柱建物群などが検出されている。今回の調査地点はSB301の北東側に位置し、関連する遺構の存在が想定された場所である。以下、遺構ごとに簡単な検討を行う。

まずSA17は、北隣の第54次調査(注3)や第72次調査(注4)に明確に続く柱穴は無い。南隣の第7次調査(注5)では多数のピットが検出されているが、本調査地点と間隔があり、どのピットが柱穴に対応するか不明である。その一方で調査区の西方に目を向けると、第10次調査ではSA878が検出された(注6)。心芯距離は2.5~2.6mでSA17より若干広く、主軸方位はN-87°-WとN-7.5°-EのSA17に直交しない。さらに、本調査地点と第10次調査の間にある第20次調査では、続きとなる柵列が検出されていない(注7)。これらの遺構は出土遺物に乏しく、同時期に併存し



第52図 ヘボノ木遺跡中央地区主要遺構図(1/1,000)

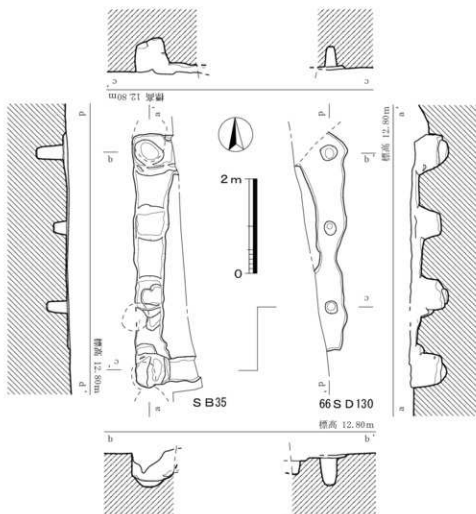
たのか、あるいは時期差があるのかは、不明と言わざるを得ない。これらの柵列がS B 301と併存したと仮定すれば、S B 301の周囲に位置するこれらの柵列は、S B 1333に付属するS A 1330・1332・1334 (注8) のように、S B 301北東部の空間に対する目隠しの塀だった可能性がある。

S B 3は、桁行とみられる南北方向の長さが9.6mを測る。回廊と外周周溝の間に位置する掘立柱建物は、後述する総柱建物を除けば、S B 1661 (注9) やS B 2505 (注10) が挙げられる。いずれも、柱穴の規模や心芯距離、主軸方位がS B 3に類似する。また、2棟ともにS B 201のII期に併存するとされている。このことから、S B 3もS B 1661・2505と同時期、S B 301 II期の建物とすることができ、S B 301の付属施設だった可能性を示唆する。

S B 35は断面の形状から、溝の底部に柱穴を壺掘りした、布掘り基礎II類 (注11) の掘立柱建物と判断した。遺構の東側は調査区の外に及ぶが、東隣の第66次調査には、S B 35の東隣に溝と柱穴からなる遺構66 S D 130が位置する (注12)。整理時の台帳によると、出土遺物は若干の土師器細片のみで、風倒木痕の可能性が指摘されている。しかし、溝の底部にピットが並ぶ様子は、S B 35に類似する。そこで、S B 35と66 S D 130を座標上で合成し、断面を起こしたのが第53図である。削平により66 S D

130の掘方は底部付近の約10cmのみ残り、柱穴は3基のみ、直径もS B 35と異なるが、S B 35の延長上に66 S D 130が位置することが分かる。S B 35と66 S D 130が同一の遺構とすると、未掘箇所を挟むが、南北5.4m、東西4.5mの布掘り基礎を有する、2～3間の掘立柱建物である可能性が窺える。

その性格を探るうえで注目すべき遺構は、本調査地点の南側の第7・33次調査で検出された、S B



第53図 S B 35・66 S D 130実測図 (1/80)



304・1924・1925である。これらは2×2間または3×2間の総柱建物で、規模はS B35に類似する。特にS B1925は、S B35と同様に布掘り基礎を有する(注13)。列状に並ぶS B304・1924・1925の北隣に位置することからも、S B35・66S D130がこれらの総柱建物群の一部と想定でき、その年代もS B304・1924・1925と同じS B301Ⅱ期に収まる(注14)と考えられる。

S D1の走行方位は、東合川三丁目を含む山川・東合川条里区の主軸N-16°-E(注15)に近似する。出土遺物に乏しいが、S D1は条里制に伴う溝の可能性はある。ただし、北東側の第72次調査ではS D1の延長上に溝を検出しておらず(注16)、著しく削平されているか、短い溝の可能性もある。S D2と埋土や主軸方位が同一のS D5は、調査地点付近が区画整理される前の水田の地割N-10°-E(注17)に並行し、S A17やS B3といった主要遺構に後出する。基本層序で述べたとおり、S D2・5および埋土が同じピットが地山直上の層に後出することから、古代より後世の遺構と考えられる。S D42は、66S D60の延長上にあり、同一の溝と考えられる。その年代は、第66次調査でも「かなり新しい時期」とされており、66S D120に後出することから、少なくとも9世紀以降と考えられる。

以上、第75次調査では、S B301の付属施設とみられる複数の遺構を検出した。第20・52図に示したとおり、ヘボノ木遺跡の中央部は大部分が調査済だが、未調査箇所には多くの遺構がまだ眠っていることを示す調査となった。(西)

【注】

- (1) 白木守「【資料紹介】久留米市ヘボノ木遺跡出土の栗浪系土器」福岡考古談話会『福岡考古』第18号 平成11年
- (2) 小澤太郎「寺院か官衙か—福岡県久留米市所在ヘボノ木遺跡の機能をめぐって—」『古代東国の考古学』平成17年
- (3) 久留米市教育委員会『ヘボノ木遺跡 平成6年度発掘調査概要』久留米市文化財調査報告書第98集 平成7年
- (4) 久留米市文化財保護課『久留米市文化財保護課年報』Vol.12 平成29年
- (5) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第1集』久留米市文化財調査報告書第29集 昭和56年
- (6) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第3集』久留米市文化財調査報告書第39集 昭和59年
- (7) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第6集』久留米市文化財調査報告書第50集 昭和62年
- (8) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第4集』久留米市文化財調査報告書第43集 昭和60年
- (9) 注7文献と同じ。
- (10) 注3文献と同じ。
- (11) 奈良文化財研究所『古代の官衙遺跡 I 遺構編』平成15年
- (12) 久留米市教育委員会『ヘボノ木遺跡 平成10年度発掘調査概要』久留米市文化財調査報告書第151集 平成11年
- (13) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第8集』久留米市文化財調査報告書第58集 平成元年
- (14) 注3文献と同じ。
- (15) 樋口一成「筑後河南の条里制」久留米市史編さん委員会・編『久留米市史』第1巻 久留米市 昭和56年 P.448
- (16) 注4文献と同じ。
- (17) 注5文献と同じ。

## IV. 筑後国分尼寺跡（第2次調査）

### 1. 調査に至る経緯

本調査は、建売住宅建設に先立つ発掘調査である。令和3年11月8日、土地所有者から久留米市国分町字西村497-2における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国分尼寺跡に当たり、昭和55年度に筑後国分寺跡第19次調査として発掘調査を実施した場所である（注1）。調査の記録を再検討した結果、調査地に版築が築かれた可能性があることから、12月13日、土地所有者に対して発掘調査が必要である旨を回答した。令和4年3月22日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、4月11日から4月26日まで現地での発掘調査を実施した。対象面積270㎡のうち、調査面積は宅地部分の38㎡である。

### 2. 位置と環境

久留米市の南東部に連なる耳納山地の西端には、標高312mの高良山が聳え、その西側には多くの丘陵が立地している。本調査地は高良山から派生する丘陵の先端部に位置し、標高28mを測る。

本調査地付近では縄文時代から近世まで数多くの遺跡が確認されている。

正福寺遺跡からは縄文中期～後期の土坑やドングリピットなどが確認され、南福寺式土器や鐘崎式土器、北久根式土器など後期の土器が多数出土している。その中でも、第7次調査では谷部分で編組製品や直柄石斧など各種大量の遺物が出土しているが特筆できる。

弥生時代には、筑後国分寺跡第30次調査で中期の竪穴建物が確認されているほか、日渡遺跡で後期の竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。

古墳時代には、高良山から派生する丘陵上に前期～後期の古墳が多数認められる。祇園山古墳は高良山西側丘陵上にあり、一辺23～24m、高さ6mの方墳で、箱式石棺を主体としており、葺石を2段にわたって巡らしている。隈山古墳群では2基の円墳が確認され、2号墳からは銀製のくちなし玉が14個体出土している。浦山古墳は全長60mの帆立貝式の前方後円墳で、横穴式石室の内部には妻入の横口式家形石棺が納められている。石室内は同心円文帯・直弧文・鍵手文の線刻や赤色顔料が施されている。古墳が多く確認されている一方で、本調査地周辺での古墳時代の集落跡は、平野遺跡で見つかった6世紀後半の掘立柱建物と竪穴建物群が挙げられるのみにすぎない。

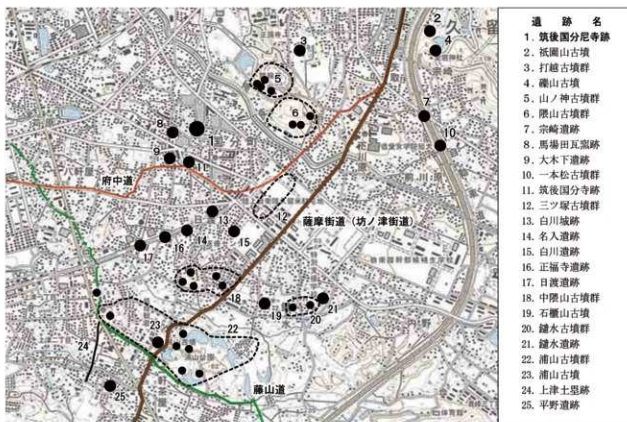
7世紀後半に東アジアの政治的緊張が高まると、大宰府に対する有明海側からの防衛のために上津土塁跡が築かれた。上津土塁は、明星山から派生した浦山丘陵と本山丘陵を結び、上津荒木川が形成した谷部を塞ぐように構築されている。全長は約450mあったとされるが、現在は削平され、約20mを残すのみである。天平13年（741）に国分寺造立の詔が出されると、各国で国分寺が造営

された。筑後国分寺は、高良山から西側に派生する丘陵の先端に立地する。『続日本紀』天平勝宝八年（756）十二月二十日の条には、西海道諸国の国分寺の一つとして記述されることから、8世紀半ばには主要な伽藍部分が完成していたと考える。伽藍配置は、講堂や塔の配置から大官大寺式の伽藍配置が推定されてきたが、回廊については関連遺構が検出されていない。なお、この時期には藤山道に代わって、西海道が整備される。

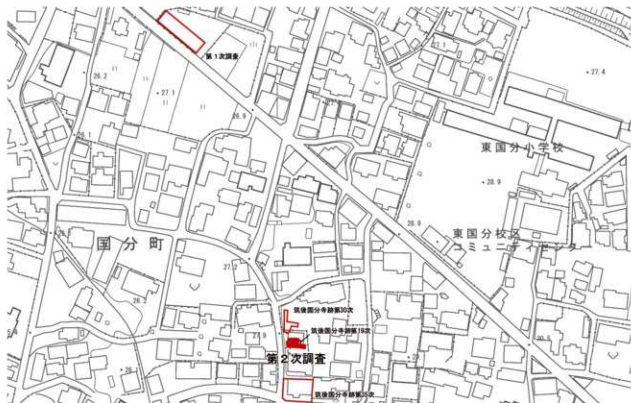
筑後国分寺跡の北側に位置する調査地点付近は、「尼寺」が変化したとされる「西村」という字であることから、筑後国分尼寺の推定地とされてきた。しかし調査例が少なく、詳細な伽藍配置や寺域などは不明である。馬場田瓦窯跡は、筑後国分寺の講堂から北北西に約270m、かつて「瓦塚」という字だった位置に所在する。昭和39年（1964）に九州大学考古学研究室によって調査が行われ、窯本体は確認されていないものの、物原から単弁九葉の軒丸瓦が出土したことから、国分寺建立の際に作られた瓦窯だとされている。このほか、日渡遺跡の発掘調査では、越州窯系青磁碗や「朝」の印文が鋳出された蒼紐有孔形の銅印が出土した。

国分寺および国分尼寺は、10世紀以降に律令制度が弱体化していくのに伴い、規模を縮小したとされる。本調査地の周辺では、鎌水遺跡で12～14世紀の溝、白川遺跡で14～15世紀の溝が検出されており、平面形から、いずれも方形館の可能性が示唆される。

近世に入ると、筑後国主田中吉政によって柳川と久留米城下をむすぶ柳河往還が整備されたほか、柳河往還から分岐して御井町で薩摩街道（坊ノ津街道）に合流する「府中道」もつくられた。



第54図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第55図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

### 3. 調査の記録

#### （1）調査の経過

今回の発掘調査は、筑後国分寺跡第19次調査の調査範囲の再確認と、版築の有無、その性格の確認を目的に実施した。対象地の都合上、調査区は南北で二分した。令和4年4月13日、重機で南区の表土剥ぎを実施した。翌14日に座標移動を行った後、遺構の掘り下げと並行して、測量や撮影などの記録を開始した。土層断面から版築の痕跡が確認できたため、南部にサブトレンチを設定し地山面まで掘り下げ、土層の観察を行った。4月19日に完掘状況の写真を撮影した後、土層図を作成した。4月23日に重機による埋め戻しを行った後、北区の表土を剥ぎ、版築の広がりを確認し、同日中に埋戻しを行った。4月26日に器材を撤収して、現地での発掘調査を終了した。



第56図 南区遺構検出状況（西から）



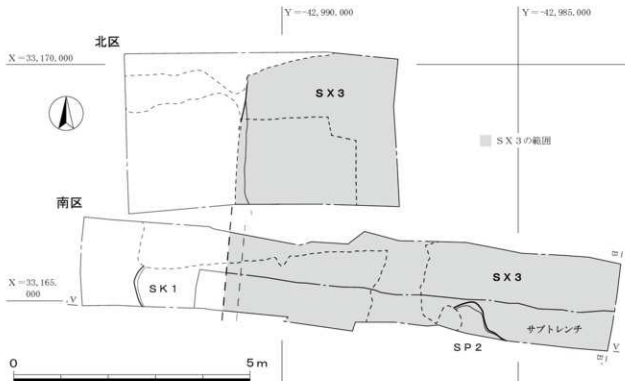
第57図 南区サブトレンチ掘削状況（西から）



第58図 北区遺構検出状況（西から）



第59図 北区調査風景（西から）



第60図 遺構配置図 (1/80)

## （2）基本層序

本調査地点の現況は宅地で、調査区の西側は市道が南北に走行し、道路路面は調査地よりも標高が低くなる。地表下50cmまでは表土が堆積し、表土直下で遺構を検出した。遺構の上面は後世の開発により大きく削平されている。地山は地表下140cmで到達し、礫混じりの暗黄褐色砂質土である。

## （3）検出遺構

土坑とピット、基壇を各1基検出した。以下、遺構について述べる。

### 土坑

#### S K 1（第60・63・73図）

南区西部で検出した円形の土坑である。平面形は円形または楕円形と考えられるが、南部は調査区外へ延び、北部の擾乱や東部の基壇S X 3に先出しているため詳細は不明である。長軸長1.5m以上、短軸長0.8m以上を測る。上面は削平を受け、深さ0.15mしか残っていない。底面は平坦である。埋土は暗赤褐色粘質土である。弥生土器の甕、壺、高坏の破片がわずかに出土している。弥生時代後期に属する。

### ピット

#### S P 2（第60・61・74図）

南区西部で検出した。平面形は不整形を呈す。S X 3に後出し、南部は調査区外へ延びる。長軸長70cm以上、短軸長50cmを測る。上面は削平を受けており、深さは0.1mしか残らない。埋土は暗褐色粘質土である。平瓦が出土したが、遺物が少ないため時期は不明である。

### 基壇

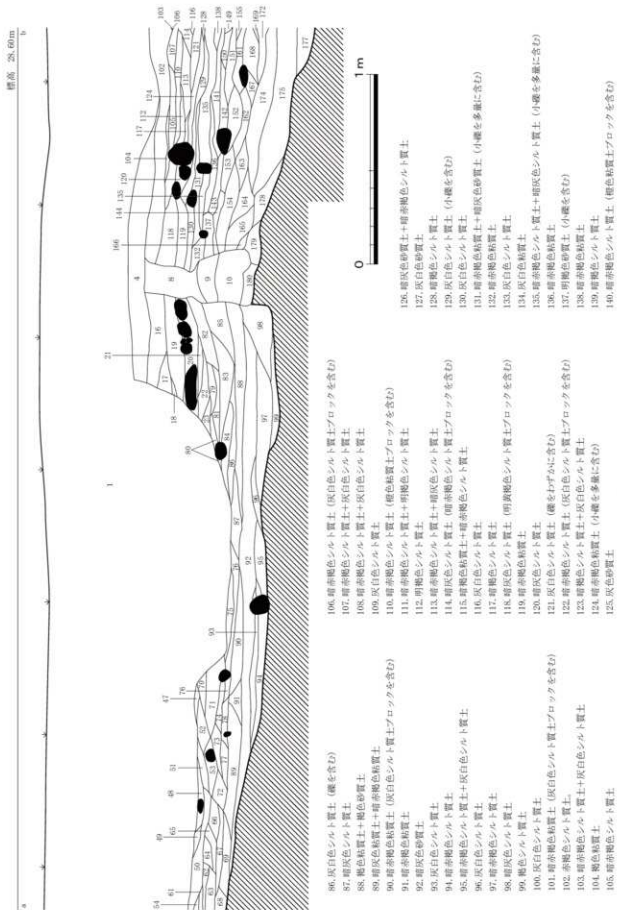
#### S X 3（第60～72図）

調査区東半で検出した。調査区内では基壇の西端が確認でき、東部と北部、南部は調査区外へ広がる。上面は後世に削平されているが、底部付近で版築の土層堆積を確認できた。確認できる範囲は南北5.7m、東西8.2mである。西端は灰白色砂質土が幅35cmで地山面まで堆積している。南区では表土剥ぎの際、西端部を地山面まで掘削してしまったが、灰白色砂質土層は南北に走行していた。基壇の西端に意図的に灰白色砂質土を充填しており、基壇化粧に関わる可能性がある。調査区南壁の土層断面図では同様の灰白色砂質土が西端から2.4mでみられるが、遺構検出面で南北方向への広がりには確認できなかった。版築土層は一層の厚さ2～3cm程度で薄く、40cm程度の幅で水平堆積している。地山土である黄褐色粘土や黄色シルト、暗褐色砂質土などを混合させ突き固めたと考えられ、基本的に非常にしまりがある。大小の円礫を含む層もあり、遺構検出面ではほぼ全面に礫が広がっていた。出土遺物は少なく、弥生土器の甕や高坏、壺、土師器の坏の細片のみである。

## （4）出土遺物（第75～79図、第4表）

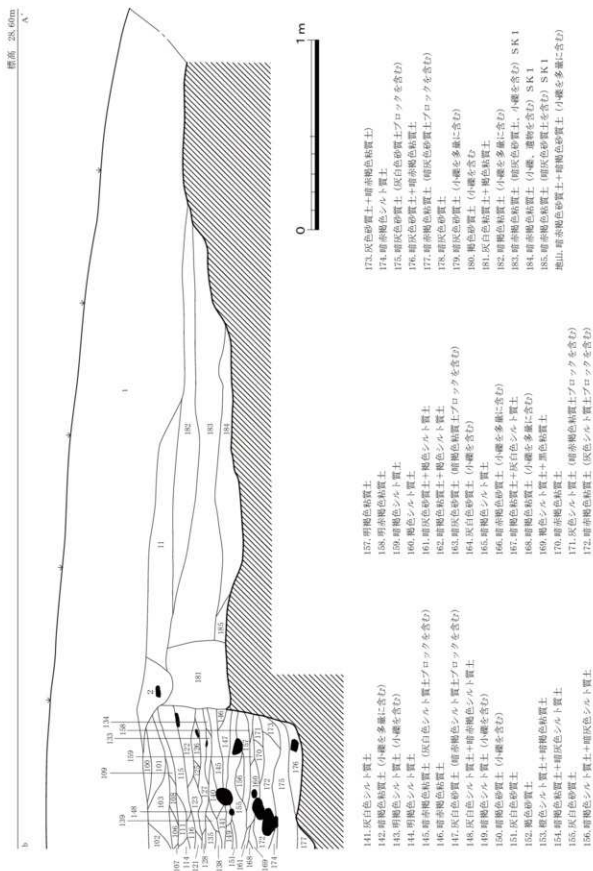
出土遺物は総じて少なく、その合計はバンコンテナー0.5箱にも満たない。古代の土師器と瓦、弥生土器が出土した。8～15は筑後国分尼寺跡で採集された瓦の一部で、9～15は武藤直治氏、古賀幸雄氏の採集遺物である。出土遺物の詳細については遺物観察表を参照いただきたい。



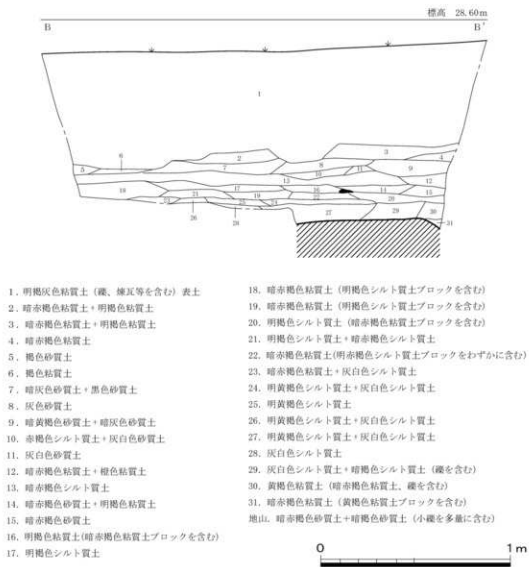


第 62 図 南区東西土層図 2 (1/20)





第63図 南区東西土層図3 (1/20)



第 64 図 南区南北土層図 (1/20)



第 65 図 南区東西土層堆積状況 1（北から）



第 66 図 南区東西土層堆積状況 2（北から）



第 67 図 南区東西土層堆積状況 3（北から）



第 68 図 南区東西土層堆積状況 4（北から）



第 69 図 南区東西土層堆積状況 5（北から）



第 70 図 南区東西土層堆積状況 6（北から）



第 71 図 南区東西土層堆積状況 7（北から）



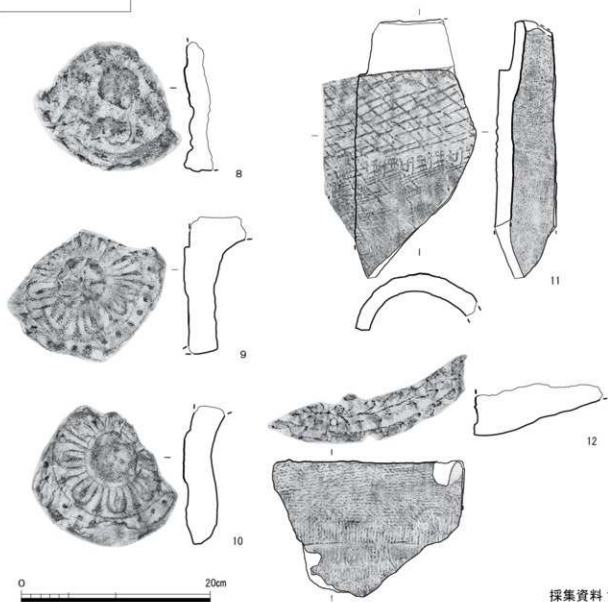
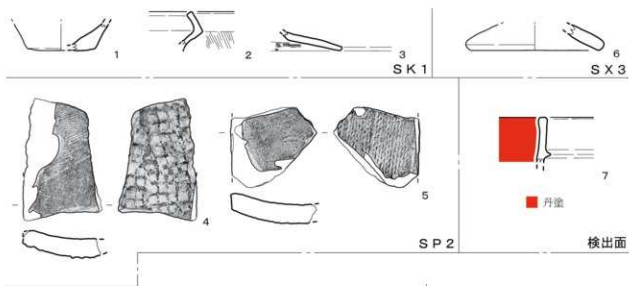
第 72 図 南区南北土層堆積状況（西から）



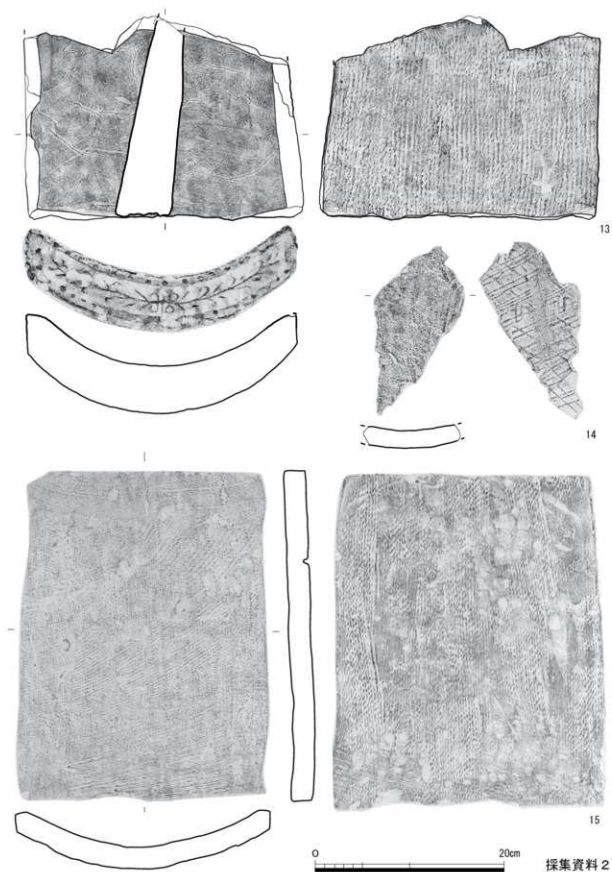
第 73 図 SK1 完掘状況（北から）



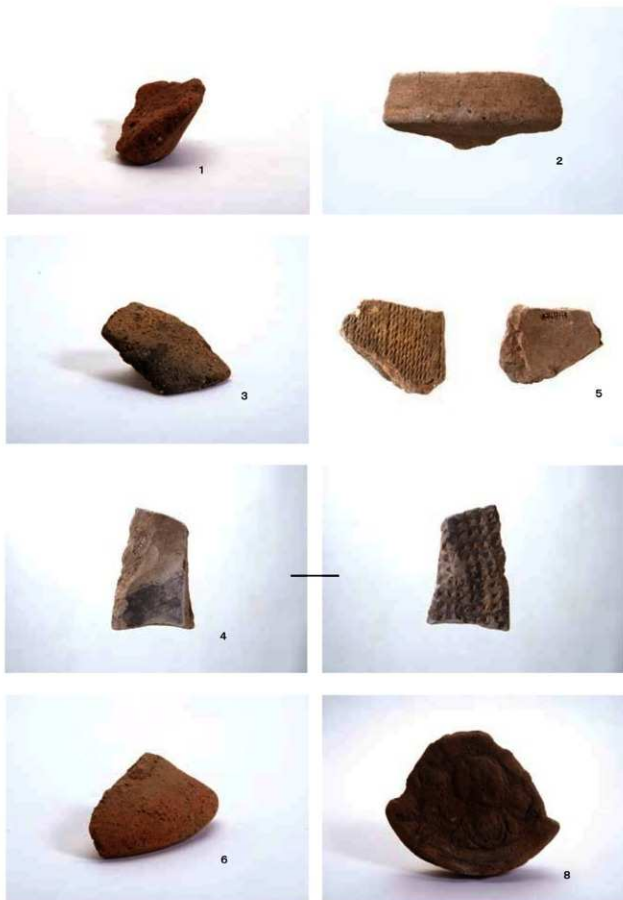
第 74 図 SP2 完掘状況（東から）



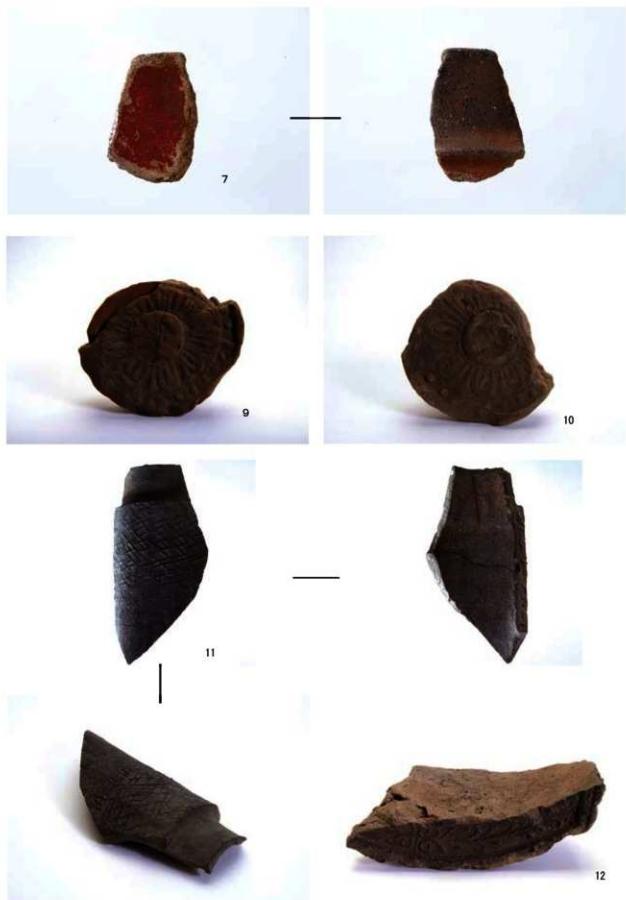
第75図 出土遺物実測図1 (1/4)



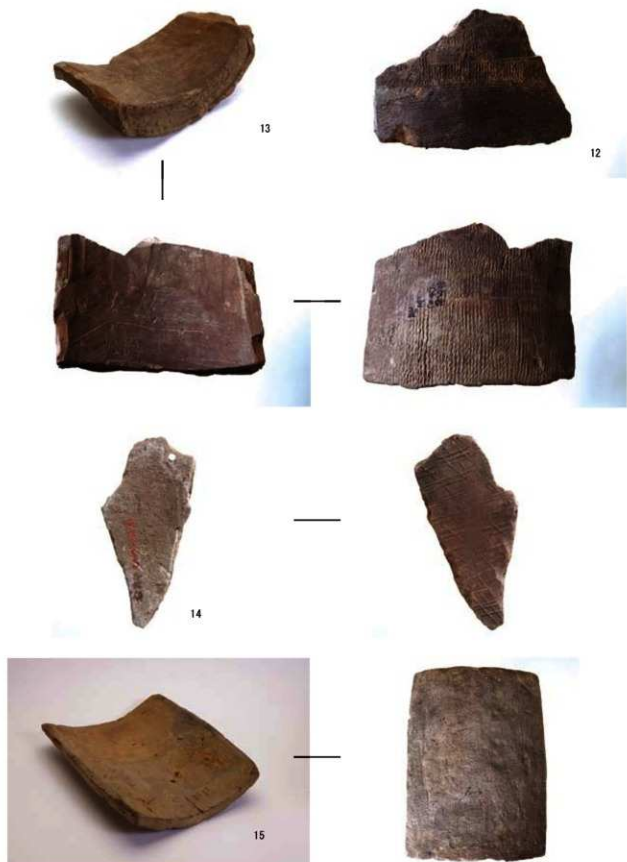
第76圖 出土遺物実測図2 (1/4)



第 77 図 出土遺物写真 1



第78図 出土遺物写真2



第79図 出土遺物写真3



第4表 筑後国分尼寺跡第2次調査出土遺物観察表

遺物 No.	出土遺構	種類	形種	寸法 (cm)			色調				土質	備考	遺物登録番号
				長さ	幅 (幅)	高さ (高さ)	外壁(凸部)	内壁(凸部)	外壁(凹部)	内壁(凹部)			
1 遺15・770	SK1	弥生土器	壺	—	[7.1]	(2.8)	灰褐色 にぶい緑色	緑色	ナデ	ナデ	砂粒、雲母を 含む	底面片	202202 000003
2 遺15・770	SK1	弥生土器	壺	—	—	(3.0)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	横ナデ 縦毛目	横ナデ	砂粒、雲母を 含む	口縁部片。ヘラ記号有	202202 000004
3 遺15・770	SK1	弥生土器	高杯	—	—	(2.0)	にぶい緑色 黒色	灰褐色	横ナデ	縦毛目	砂粒、雲母を 含む	底面片	202202 000005
4 遺15・770	SP2	瓦	平瓦	(13.9)	(8.3)	2.9	灰色	黒色 浅黄色	布目	横子文 叩きこ	—	—	202202 000007
5 遺15・770	SP2	瓦	平瓦	(8.3)	(8.9)	2.9	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	横目文叩き	—	—	202202 000006
6 遺15・770	SK3	弥生土器	高杯	—	[14.6]	(2.7)	緑色	緑色	横ナデ	横ナデ	砂粒、雲母、 片状石を含む	底面片 最大径：[15.95] cm	202202 000008
7 遺15・740	横出面	弥生土器	鉢	—	—	(4.8)	暗灰色 明褐色	赤色	横ナデ	横ナデ	砂粒、雲母、 片状石を含む	口縁部片、内面片 片	202202 000002
8 遺15・740	塚	瓦	軒瓦	(13.6)	(15.8)	(3.9)	暗灰色 にぶい緑色	暗灰色 にぶい緑色	厚中穴 薄華文	—	—	—	202202 000001
9 遺15・740	塚	瓦	軒瓦	(14.6)	(17.5)	(6.4)	緑色	緑色	厚中穴 薄華文	ナデ	横砂粒を含む	—	古賀市蔵資料
10 遺15・740	塚	瓦	軒瓦	(15.5)	(14.5)	(3.2)	緑色	緑色	厚中穴 薄華文	ナデ	—	—	武藤直治資料
11 遺15・740	塚	瓦	丸瓦	(27.4)	(12.9)	(6.3)	灰色	灰色	布目	横子文 叩きこ、ナデ	—	—	武藤直治資料
12 遺15・74 +740	塚	瓦	軒平瓦	(14.4)	(20.3)	(11.4)	暗灰色	暗灰色	横目文叩き 均整造華文	—	—	—	武藤直治資料
13 遺15・740	塚	瓦	軒平瓦	21.5	28.6	12.9	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	布目、ケズリ 均整造華文	横目文叩き 叩きこ	—	—	武藤直治資料
14 遺15・740	塚	瓦	平瓦	(19.2)	(11.2)	(2.4)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	布目	横子文 叩きこ	—	—	古賀市蔵資料
15 遺15・740	塚	瓦	平瓦	35.6	27.3	6.8	灰色	灰色	布目	横目文叩き スリ返し	—	—	武藤直治資料

## 4. 総括

本調査で検出された最も古い遺構は、弥生時代後期の土坑SK1である。削平著しく、底部がわずかに残るのみだが、北隣の筑後国分寺跡第30次調査（以下第30次調査）では中期（注2）、日渡遺跡では後期の堅穴建物が検出されており、調査地周辺にも中期から後期の集落の分布が想定される。

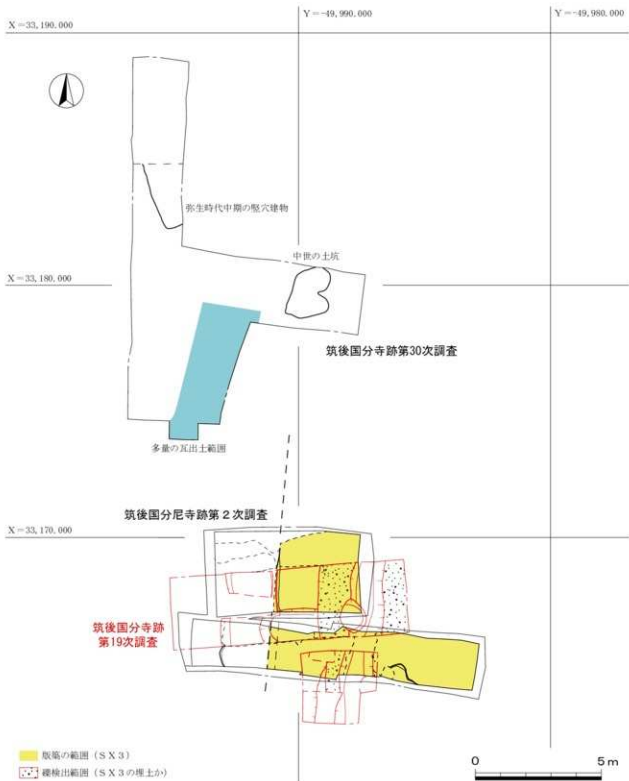
これまでの発掘調査では筑後国分尼寺に関する遺構は発見されておらず、寺域や伽藍の配置については不明である。武藤直治氏は、宇西村に寺屋敷と称する場所がある点から、その地域を尼寺の中心と推定した。また、「日吉神社前より通ずる道路より高きこと約三尺五寸なり、本堂跡は基中部を占め更に稍高くして明治維新後に至るまで土壇の面影を留めたるが如きも、今は開墾して畑地となれり」と記録した（注3）。この本堂跡は、寺屋敷にあたると思われる。調査地周辺は日吉神社に通じる南北方向の道路面より約50cm高くなっており、調査地周辺が寺屋敷であると推定される。

第30次調査では古代の遺構は確認されていないが、包含層からは古瓦が多量に出土した。出土した瓦の中には、「弓」や「延喜十九年」等の文字瓦も見られる。地山は本調査で確認できなかった黄色粘土であるため、基壇は黄色粘土層の地山を暗褐色砂質土層まで掘下げた後、築造されたと推定される。また、第30次調査で基壇の痕跡は確認されていないため、基壇の北端は第30次調査より南に位置すると考えられる。西端の灰白色砂質土は、上面で確認された北区で主軸方位N-2°-Eを測る。基壇の性格は不明だが、国分尼寺の中心とされる付近であるため、講堂や金堂の基壇の可能性はある。

今回の調査では、これまで不明だった国分尼寺の伽藍配置の一端が明らかになった。（小川原）

## 【注】

- (1) 久留米市教育委員会『筑後国分寺跡Ⅲ— 昭和55年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第27集 昭和56年  
 (2) 久留米市教育委員会『筑後国府跡・国分寺跡 昭和63年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第59集 平成元年  
 (3) 武藤直治「筑後国分寺跡」福岡県『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第三輯 昭和3年



第80図 S X 3 範囲推定図 (1/150)

## V. 高倉遺跡 (第2次調査、概要報告)

### 1. 調査に至る経緯

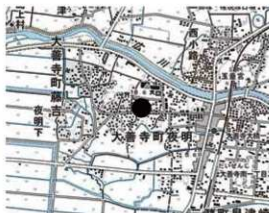
令和4年6月2日、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無について(照会)」が提出された。試掘調査の結果、ピットが複数確認されたため、6月17日に発掘調査が必要な旨を回答し、7月5日から7月29日にかけて発掘調査を実施した。

### 2. 位置と環境

調査地は、広川左岸にある標高6m前後の自然堤防上に立地する。調査地点の西側に位置する夜明神社には、筑後国守道君首名の墓と伝わる乙名塚があり、高倉遺跡内では最も標高が高い。標高は北から南へ向かい緩やかに下がり、南側には田園が広がる。西隣接地で実施された第1次調査では、弥生時代の甕棺墓や中世の土壇墓が検出されており、土壇墓から完形の青磁碗が出土した。

### 3. 調査の概要

遺構検出面は、北西から南東に緩やかに標高が下がり、地表面から遺構検出面までの深さは北部では約15cm、南部では約70cmを測る。主な遺構は、井戸や土坑、土壇墓が挙げられる。調査区南部では、直径2m以上の平安時代末の井戸が2基重複して検出した。調査区中央部でも、平安時代末と近世の直径約1.5mの井戸が各1基検出しており、複数の井戸が狭い調査範囲に集中している。土壇墓からは、土師器の小皿が出土した。第1次調査では弥生時代の甕棺墓が見つかったが、本調査では弥生時代の遺構は比較的少なく、輸入陶磁碗片などの古代から中世の遺物が多く出土した。



第81図 調査地点の位置図 (1/25,000)



第82図 調査区全景 (北上空から)



第83図 井戸掘削状況 (北上空から)

(小川原)

## VI. 庄屋野遺跡（第10～11次調査、概要報告）

### 1. 調査に至る経緯

令和4年6月13日（第10次調査）および令和4年6月3日（第11次調査）、土地所有者から専用住宅建設に伴う久留米市安武町安武本字庄屋野五2961番1の一部、2963番1の一部における「埋蔵文化財包蔵の有無について（照会）」が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である庄屋野遺跡にあたる。建物の基礎構造上、遺跡の保護が不可能であったことから、発掘調査が必要な旨を回答した。現地での調査期間は、令和4年9月8日から9月22日までである。



第84図 調査地点の位置図（1/25,000）

### 2. 位置と環境

庄屋野遺跡は、筑後川の氾濫原の東側にある標高約10mの低位台地上に位置する。周辺には、落とし穴が確認された今泉遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡や、弥生時代の集落・墓域が確認された塚畑遺跡群、古代の墨書土器や掘立柱建物群が確認された野瀬塚遺跡、野畑遺跡、念仏塚遺跡などが所在する。なお、古代の安武町一帯は、三潯郡田家郷に比定されている。



第85図 第10次調査区全景（北上空から）

### 3. 調査の概要

第10次調査では古代の柵列1条、第11次調査では掘立柱建物1棟を検出した。柵列の主軸方位は $N-9.5^{\circ}-W$ 、掘立柱建物の主軸方位は $N-8.7^{\circ}-W$ である。これらの主軸方位は、周辺の調査で確認された、8世紀後半の掘立柱建物や柵列の方位 $N-8\sim 10^{\circ}-W$ とほぼ同じくする。そのため今回確認した遺構は、それらで構成される集落の一部と考えられる。（長谷川）



第86図 第11次調査区全景（北上空から）

## Ⅶ. 庄屋野遺跡（第12～14次調査、概要報告）

### 1. 調査に至る経緯

令和4年9月9日（第12次調査）、および10月17日（第13次調査）、10月14日（第14次調査）、土地所有者から専用住宅建設に伴う久留米市安武町安武本字庄野屋五2961番1の一部、2963番1の一部などにおける「埋蔵文化財包蔵の有無について（照会）」が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である庄屋野遺跡にあたる。建物の基礎構造上、遺跡の保護が不可能であったことから、発掘調査が必要な旨を回答した。現地調査期間は令和4年11月8日から11月28日までである。



第 87 図 第 12 次調査区全景（北上空から）

### 2. 位置と環境

第12～14次調査は、第10～11次調査と同じ住宅地に位置する。周辺の歴史的環境は、第Ⅵ章を参照頂きたい。



第 88 図 第 13 次調査区全景（北上空から）

### 3. 調査の概要

第12次調査では古代の柵列2条と掘立柱建物1棟、第13次調査では古代の掘立柱建物1棟と土坑2基、第14次調査ではピットを検出した。建物の主軸方位は、 $N-9.8 \sim 18.3^\circ -W$ である。周辺の調査で確認された、8世紀後半の柵列や掘立柱建物の主軸方位は $N-8 \sim 10^\circ -W$ を測る。今回確認した柵列や掘立柱建物も、それらで構成される集落の一部であると考えられる。（長谷川）



第 89 図 第 14 次調査区全景（南西から）

# 各種開発確認調査

筑後国府跡（第311次調査）

## Ⅷ. 筑後国府跡（第311次調査）

### 1. 調査に至る経緯

本調査は、共同住宅建設に先立つ発掘調査である。令和3年10月18日、土地所有者から久留米市合川町字井葉212-1における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡にあたり、平成17年度に筑後国府跡第208次調査として発掘調査を実施している。第208次調査では基本的に遺構の上面確認で留めており、大半の遺構は残存する。今回の共同住宅建設に伴い鋼管杭を打ち込むため、遺構に影響を与えない杭配置を協議する必要があった。しかし、筑後国府跡第208次調査の時点から測量方法や周辺の環境等が変化しているため、遺構の配置を再確認する必要があった。そこで、一部で再度遺構の上面確認を行い、遺構の配置を再確認するため、土地所有者に対して発掘調査が必要である旨を回答した。令和4年2月24日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、3月7日から3月24日まで現地での発掘調査を実施した。対象面積745㎡のうち、調査面積は住宅部分の215㎡である。

### 2. 位置と環境

筑後国府が所在する久留米市は、筑後平野を東西に貫流する筑後川の左岸沿いに位置する。西流する筑後川は、久留米城が位置する宝満川との合流地点で南西へ方向を変え、有明海へ至る。

筑後国府跡は、市街地の東方約1.6km付近の東西1.0km、南北0.7km程度の範囲に展開し、筑紫平野南端に連なる耳納山地西端に聳える高良山から北西に派生する低位段丘上に立地する。この低位段丘の先端部分を通称として「枝光台地」と呼び、高良川以東の合川町一帯を指す。

筑後国府跡から筑後川までの距離は現在0.6km程度であり、高良川と筑後川の合流地点にも近い。遺跡が立地する台地の南端には水縄断層が東西に伸びており、断層崖下には湧水が多数見られる。また、台地北端でも比高1m程度になる段差が存在し、その下は筑後川の氾濫原を形成している、西端の高良川、北端の氾濫原、南端の断層崖、東側の井田川に囲まれた範囲が国府城の四至を画す。

筑後国府が位置する低位段丘上には、旧石器時代から近世まで数多くの遺跡が確認され、久留米市内でも特に遺跡が集中する地域である。

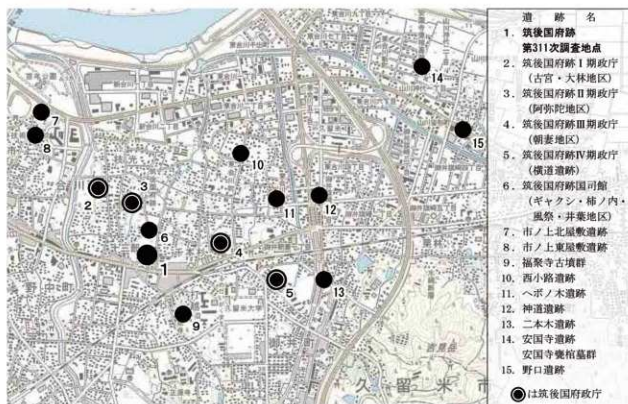
代表的な遺跡として、縄文時代前期の標識遺跡である野口遺跡や、石冠や石棒が出土した西小路遺跡、弥生時代中期中葉から後期初頭の甕棺墓や祭祀土坑が検出された国史跡の安国寺甕棺墓群、環状土坑列が確認された市ノ上北屋敷遺跡、円墳や方墳が確認された福聚寺古墳群、古墳時代初頭の1辺約25mの方形区画溝が検出された県史跡の市ノ上東屋敷遺跡が挙げられる。

7世紀後半、枝光台地西端の田代・古宮地区を中心に大溝や土塁、河川によって囲まれた台地に



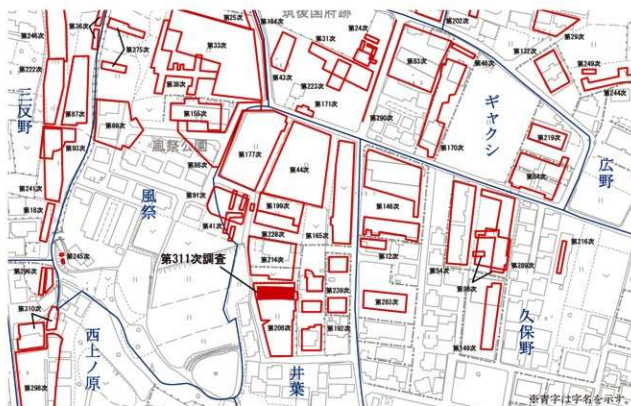
「前身官衙」と仮称される官衙的な遺構群が出現する。その後、筑後国が成立した7世紀末から8世紀中頃にかけて、古宮地区に南北約180mの築地塀で区画された成長的な官衙が営まれる（Ⅰ期政庁）。九州において律令体制が安定した時期を迎える8世紀中頃に古宮地区から約200m東の阿弥陀地区に築地塀で区画され、9世紀前半には礎石建物が築造される南北75m、東西67.5mの政庁が営まれる（Ⅱ期政庁）。Ⅱ期政庁では、西廡殿や政庁前の朝妻殿的な建物群、築地塀、大量の古瓦等が検出されている。この時期、政庁付属官衙群は枝光台地一帯に広がり、各官衙ブロック毎に計画方位をもって造営されており、Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東約200mの場所には、国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は10世紀前半に火災に焼失したと推定され、政庁は再び移転する。Ⅲ期政庁は、Ⅱ期政庁から東へ約600mの朝妻地区に位置する。付属する官衙群はⅢ期政庁の東に多数確認されており、国司館と推定される施設も存在する。さらに11世紀末には南東約400mへ再び移転し（Ⅳ期政庁）、『高良記』に見える「今ノ苜」と考えられるこの政庁は、12世紀後半頃まで存続していたようである。『筑後国検交代使実録帳』には、大治5年（1130）から仁治2年（1241）までの国府院や駅館の荒廃した様子が描かれ、南北朝争乱期には懐良親王が筑後国府に陣を置いた記事がある。実質的な機能は別として、筑後国府の名称は15世紀まで存続したと推測される。13世紀以降の国府に関連する遺構は発見されていないが、今後の調査で明らかになると思われる。

第311次調査地点は国司館地区の南部にあたり、第208次調査地点の北部にあたる。第208次調査では、国司館の東部を南北に走行する道路跡の一部や溝等を検出し、国司館南区画のさらに南側に南北半町規模の区画施設を確認している。



第90図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)





第 91 図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2, 500)

### 3. 調査の記録

#### (1) 調査の経過

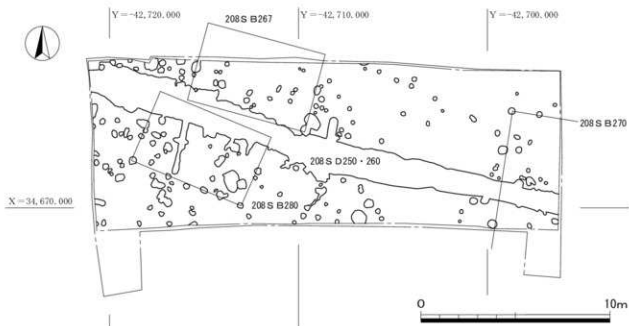
今回の発掘調査は、第208次調査地点の北半部にあたる、建物建設地の遺構配置を再確認することを目的とした。令和4年3月7日、重機で南区の表土剥ぎを実施した。翌8日に座標移動と並行して測量や撮影などの記録を開始した。検出完了後、3月22日に調査区の写真を撮影し、3月23日に重機による埋め戻しを行った。3月24日に器材を撤収し、調査を完了した。



第 92 図 調査風景 (南西から)

#### (2) 検出遺構と出土遺物

第208次調査で検出されたS B 267・280やS D 250・260等を検出した。遺構の詳細については、『筑後国府跡 国分寺跡—平成18年度発掘調査報告・概要報告—』（久留米市文化財調査報告書第249集、平成19年）を参照いただきたい。遺構の上面確認で留めているため、出土遺物は土師器と須恵器の細片がビニール小袋1袋分出土したのみである。



第 93 図 遺構配置図 (1/200)



第 94 図 調査区全景 (南上空から)

#### 4. 総括

調査の結果、第208次調査で検出した遺構の配置を再確認した。遺構に影響がない建物設計を協議し、遺跡を後世に残すことができた。

## 報告書抄録(1)

ふりがな	れいわ4ねんど くろめしなにいせきでん
書名	令和4年度 久留米市内遺跡群
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第442集
編著者名	西拓巳(編)・小川原励・長谷川桃子
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 Ⅱn 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email: bunkazai@city.kurume.lg.jp
発行年月日	2023(令和5)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さんただいせき 三反田遺跡 たい じちようき 第2次調査	くろめしなにいせき 久留米市荒木町 しらくち 白口2477-4	40203	30802	33° 16' 39"	130° 29' 43"	20210607 / 20210625	119㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三反田遺跡 第2次調査	集落	古代	溝 畝状遺構		3条 1基 土師器、須恵器、古瓦、 陶磁器		古代の溝などを検出した。	
要 約								
三反田遺跡は、上津荒木川に面した丘陵上に立地する。今回の調査では、古代の溝3条と畝状遺構1基を検出した。南西約110mに位置する第1次調査地点では、7世紀～8世紀前半の井戸や廃棄土坑が検出されており、今回検出した遺構はその周縁部の様相を示すと考えられる。								
土木工事の届出日			令和3年6月1日			遺物の発見通知日		令和3年6月30日 (3文財第899号)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
へいせき ヘボノ木遺跡 たい じちようき 第75次調査	くろめしなにいせき 久留米市東合川三丁 みちゆうめい 目 12番17	40203	30145	33° 18' 54"	130° 33' 04"	20220207 / 20220311	85㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ヘボノ木遺跡 第75次調査	集落	古代	柱列 掘立柱建物 溝 土坑		1条 2棟 5条 1基 土師器、須恵器、古瓦、 貿易陶磁器、鉄製品		回廊状遺構北東側の掘立柱 建物を検出した。	
要 約								
調査地点はヘボノ木遺跡の中央地区に位置し、回廊状遺構を伴う四面廂建物の北東側にあたる。検出した2棟の掘立柱建物は、主軸方位が四面廂建物と同一である。1棟は布状基礎を有し、東隣の第66次調査地点で検出された基礎と共に、総柱建物に復元できる。								
土木工事の届出日			令和3年12月15日			遺物の発見通知日		令和4年3月17日 (3文財第3241号)

## 報告書抄録(2)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごこぶにじあ 筑後国分尼寺跡 だいじちようき 第2次調査	くるめしこくぶまちあざ 久留米市国分町字 にむら 西村497-2	40203	30617	33° 17' 53"	130° 32' 18"	20220411 / 20220426	38㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国分尼寺跡 第2次調査	社寺	古代	基壇 土坑 ピット	1基 1基 1基	弥生土器、土師器、 古瓦		筑後国分尼寺を構成する建物の基壇を確認した。	
要約								
調査地点は、過去に筑後国分尼寺跡第19次調査を行った場所にあたる。第19次調査の報告で版築状の土層が確認されていたため、版築遺構の確認を目的として調査を実施した。調査の結果、長さ8.2m以上、幅5.7m以上にわたり版築が確認され、筑後国分尼寺の遺構を初めて確認できた。								
土木工事の届出日			令和4年1月11日		遺物の発見通知日		令和4年5月2日 (4文財第402号)	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
市町村	遺跡番号							
たかひないせき 高倉遺跡 だいじちようき 第2次調査	くるめしだいいぜんじまち 久留米市大善寺町 よあけ 夜明1117-7	40203	30743	33° 16' 27"	130° 28' 7"	20220705 / 20220729	95㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高倉遺跡 第2次調査	集落	古代 中世	井戸 土坑 土壇墓 ピット	4基 1基 1基 多数	土師器、須恵器、輸入 陶磁器、石製品		古代から中世の集落遺構を確認した。	
要約								
高倉遺跡は、広川左岸の中位台地に位置する。調査区南部では、直径2m以上の平安時代末の井戸を2基重複した状態で検出した。調査区中央部では、平安時代末と近世の直径約1.5mの井戸を検出し、複数の井戸が狭い調査範囲に集中している。土壇墓からは、承切底の小皿が出土した。								
土木工事の届出日			令和4年6月20日		遺物の発見通知日		令和4年8月4日 (4文財第1319号)	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
市町村	遺跡番号							
しろうのいせき 庄屋野遺跡 だいじちようき 第10次調査	くるめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけほんあざしろうの 安武本字庄屋野五 ばん 2961番1の一部、 ばん 2963番1の一部	40203	31131	33° 17' 71"	130° 29' 41"	20220908 / 20220922	59㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
庄屋野遺跡 第10次調査	集落	古代	櫓列 ピット	1条 多数	土師器、須恵器		古代の集落跡を確認した。	
要約								
庄屋野遺跡は、標高10mの低位段丘上に位置する。今回の調査では、櫓列1条と多数のピットを確認した。過去の調査で確認した掘立柱建物や櫓列と方向を同じくするため、集落を構成する櫓列の1つとみられる。								
土木工事の届出日			令和4年6月28日		遺物の発見通知日		令和4年9月26日 (4文財第1788号)	

## 報告書抄録(3)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しょうやのいせき 庄屋野遺跡 ない じちようさ 第11次調査	くろめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけはんあざしょうやのご 安武本字庄屋野五 ぼん 2961番1の一部、 ぼん 2963番1の一部	40203	31131	33° 17′ 53″	130° 29′ 41″	20220908 、 20220922	95㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
庄屋野遺跡 第11次調査	集落	古代	掘立柱建物 ビット	1棟 多数	土師器、須志器		古代の集落跡を確認した。	
要 約								
庄屋野遺跡は、標高10mの低位段丘上に位置する。今回の調査では、掘立柱建物とビットを確認した。掘立柱建物は、過去の調査で確認した柵列や掘立柱建物と方向を同じくするため、同じ集落を構成する遺構の1つとみられる。								
土木工事の届出日			令和4年6月28日			遺物の発見通知日		令和4年9月26日 (4文財第1791号)
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
市町村	遺跡番号							
しょうやのいせき 庄屋野遺跡 ない じちようさ 第12次調査	くろめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけはんあざしょうやのご 安武本字庄屋野五 ぼん 2961番1の一部	40203	31131	33° 17′ 53″	130° 29′ 41″	20221108 、 20221128	89㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
庄屋野遺跡 第12次調査	集落	古代	柵列 掘立柱建物 ビット	2条 1棟 多数	土師器、須志器		古代の集落跡を確認した。	
要 約								
庄屋野遺跡は、標高10mの低位段丘上に位置する。今回の調査では、柵列2条と掘立柱建物1棟、ビットを確認した。柵列と掘立柱建物は、過去の調査の柵列や掘立柱建物と方向を同じくするため、集落を構成する遺構の1つとみられる。								
土木工事の届出日			令和4年9月9日			遺物の発見通知日		令和4年12月1日 (4文財第2421号)
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
市町村	遺跡番号							
しょうやのいせき 庄屋野遺跡 ない じちようさ 第13次調査	くろめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけはんあざしょうやのご 安武本字庄屋野五 ぼん 2961番1の一部	40203	31131	33° 17′ 53″	130° 29′ 41″	20221108 、 20221128	89㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
庄屋野遺跡 第13次調査	集落	古代	掘立柱建物 土坑 ビット	1棟 2基 多数	土師器、須志器		古代の集落跡を確認した。	
要 約								
庄屋野遺跡は、標高10mの低位段丘上に位置する。今回の調査では、掘立柱建物1棟、土坑2基とビットを確認した。過去の調査で確認した掘立柱建物や柵列と同じ集落を構成するものと考えられる。								
土木工事の届出日			令和4年11月4日			遺物の発見通知日		令和4年12月1日 (4文財第2424号)

## 報告書抄録(4)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しょうやのいせき 庄屋野遺跡 だい じちようき 第14次調査	くろめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけほんあざしょうやの 安武本字庄屋野五 ほん ほか ひの 2932番1他11筆の一 部	40203	31131	33° 17' 53"	130° 29' 40"	20221108 / 20221128	9㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
庄屋野遺跡 第14次調査	集落	古代	ピット		多数 土師器、須恵器		古代の集落跡を確認した。	
要 約								
庄屋野遺跡は、標高10mの低位段丘上に位置する。今回の調査ではピットを確認し、過去の調査で確認した遺跡の広がり の一部とみられる。								
土木工事の届出日			令和4年11月21日			遺物の発見通知日		令和4年12月1日 (4文財第2427号)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごこくふあと 筑後国府跡 だい じちようき 第311次調査	くろめしあいかわまち 久留米市合川町 あざいば 字井葉212-1	40203	30112	33° 18' 43"	130° 32' 29"	20220307 / 20220324	215㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国府跡 第311次調査	集落 官衙	古代	掘立柱建物 溝		3棟 1条 土師器、須恵器		国司館跡南部の遺構配置を 再確認した。	
要 約								
調査地点は、第208次調査の北部に位置する。今回、遺構を保護するよう共同住宅の設計変更を協議するために、遺構の検 出を再度実施した。調査の結果、現在の座標と第208次調査の図面を照合することができた。								
土木工事の届出日			令和3年10月29日			遺物の発見通知日		令和4年3月30日 (3文財第3369号)

令和4年度

### 久留米市内遺跡群

久留米市文化財調査報告書 第442集  
令和5年(2023)3月31日 発行  
発行：久留米市教育委員会  
編集：久留米市 市民文化部 文化財保護課  
印刷：中村印刷株式会社  
久留米市梅満町 972